
平凡な守り神

yuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡な守り神

【Nコード】

N0908K

【作者名】

yuki

【あらすじ】

平凡な大学生、稲葉碧^{いなばあおい}。ただいま異世界にて守り神を年中無休、24時間やっています。

平凡な私（前書き）

初小説です。お見苦しいものも多々ありますがよろしくおねがいします。

平凡な私

私は、自他共にみとめる平凡な大学生、稲葉碧^{いなばあおい}。特別勉強やスポーツができるわけでもなく、反対に全くできないという訳でもない。唯一の自慢はすぐ寝起きが悪いこと。自慢ではないと友達からは言われているけど、大事な試験とか試合の前には羨ましがられるので自慢にしています。

家族構成は会社員の父、パートの母、OLの姉に高校生の弟。ついでにペットの柴犬ジン。もちろん親戚や近所にオリンピックピック選手や大企業の重役さんもない。芸能人なんて会った事もない。

スポーツも水泳やバレーしてたけどせいぜい県大会出場（1回戦敗退）が関の山。

うん。やっぱり平凡だよ、私。H・E・I・B・O・N＝稲葉碧って方程式もできるくらいにね。なのに今の状況なに？まわりは真っ暗、おまけに手を伸ばすと何か固いものに当たります。おいおい神様、私が閉所恐怖症だったり暗闇恐怖症だったらどうするのよ。幸い私は大丈夫だけどさー（快適睡眠空間は押入れだと思っの）。

ちょっと現実逃避しているのはさっきから聞こえてくる音。何かをつつく音のような気がする……。例えるなら卵をつつく音とか……。あれ、なんかやな予感がするゾ。もしかして巨大な卵の中いるのかな。まさかね、そんなドッキリをするほどうちの家族に余裕はないはず、TV局の協力がなければ無理なレベルだし、全国の視聴者に私の驚く姿を放送しても視聴率は壊滅的だろうし採算が合わない。

関係ないけど人類の中で卵モドキの中に入ったのは私が初めて？全く嬉しくないけど……

そうこうしている間に、音が大きくなってキテマス。うーん、もし家族が笑っていたら無言で殴ろう。カメラが見えたら何かしらのリアクションをとろう。それ以外はあきらめよう。どこかのメタバなおじ様が“あきらめたらそこで試合終了だよ”って言ってたけどアレは今回ばかりは通用しない。

頭上のからだんだんと光が入ってきた。うーん、まぶしい。そして時々視界に入るのって巨大なくちばしですか？神様、齢20の私に人生あきらめよと……。こんな事なら思いつきりケーキとかチョコ食べるんだった！あと明日提出のレポートしなきゃよかった。

「人生あきらめてる割には余裕があるの〜」
頭上からまさかの人語。巨大なくちばしさんは、大型トラック級の鳥（話せる）でした。

ソナウイと私

「余裕があるの〜」

余裕？あるわけねえじゃん。今までの人生の中で一番心臓が働いているわ、ボケ！ばかじゃねえの。

悪態を心の中でつくながら声の持ち主を見た。

うん。でかい鳥。しかも光ってる。脂でテカってるのか。若干失礼な事を考えてみた。とゆうか頭は冷静な判断ができる状態ではない。わからない事ばかりの時って、どうでもいい事しか考えられないみたい。相手が人型だったらまた違っていたのかもしれないけど、相手はでかい鳥。下手に刺激しておやつになってもまずい。

くだらない事を考えていたらいつのまにか卵は消えてて、黄色い草原？に立っている。ナ○シカが立ってるみたいに。ちょっと私、谷を守るために犠牲になったの？あの子みたいに強くないし、身体能力高くない。

てかいつから地球は2次元に。おいおいアキバで反乱でも起こったのか。それともジブ○王国が建国されたのか。

「・・・そろそろ話を進めてもいいかのお。ついでにお主が考えて

いる事だだもれじゃぞ」

巨鳥が話だした。

おとなしく、とりあえずは話を聞いてあげよう。ここが日本、いや地球ではないのかもしれない。こんな風景、テレビでも見たことがない。

「我が名は聖鳥 ソナウイ。この世界の創造主じゃ。お主はイナバ・アオイじゃな。お主の世界の神と取引をしてこちらに来てもらったのじゃ。来てもらった理由じゃが、ある国の守り神になってほしいのじゃよ。お主は仕事を探していたのじゃろ。三食昼寝付で城付きじゃぞ。なかなかいい話ではないかのう。しかもお主は我の使いの守り神、その辺の精霊よりも遥かに高位じゃ。ストレス社会のあっちよりも居心地がよいぞ」

「ちょっと待ってっ！取引ってなに？守り神？一体何の話をしているの。ここはやっぱり地球ではないの？一体ここはどこよ。どうして私はここにいるのよ。早く家に帰して。」

ソナウイの話を聞いても全然理解できない。反対に余計に混乱する。

「ちょっと落ち着け、アオイ。取引というのは「言葉の意味を説明したら話しないから」・・・あちらの神に守り神の素質のあるものを探しておいてもらったのじゃ。守り神とは我の使いとして、我の言葉を民に伝え、また民の声を我に伝えるのじゃ。しかし守り神といても人形ではない。自身の意思で生きればよい。基本的に我は守り神に一切任せておるからの。まあ暇つぶしに遊びには行くがの！。

アオイ、ここはお主のいた世界ではない。しかし帰れん訳ではない。

そこは安心してよいぞ。ここに嫁か仕事にきたと思ってくれれば理解しやすいかのう。向こうの神にお主の周囲の人間にはうまく誤魔化せておる。ダイガクも卒業したことになっておる。学歴もばっちりじゃ。」

ソナウイは大型トラック級の身体でゆっくりと座った。あんなに大きな身体なのに何の音もしなかった。

「元の世界には帰れる・・・卒論しなくても卒業できる・・・寝食保障で城付き・・・ストレスなし・・・。あれ、結構どこるかすごく優良物件。はい、引き受けます。」

現代日本は不況で、2流大学のしかもよくわからない学部が就職するのは厳しい。資格も持っていない私は来年の就職活動においていた。無事に就職できたとしても、女子の多い職場ならではのめんどくさい決まりや上司との関係に悩んでいるのは目に見えている。

異世界の守り神が楽ではない。ソナウイの言っている事が本当なら私の意思で物事を決定してよいなら多くの人が私を利用しようと近づいてくるだろう。たぶん会社で働くよりも大変だろう。それでも、あの女特有の關係に悩ませられるよりはマシだ。

中学では、部活のレギュラーをめぐってメンドクサイ事になった、先輩に気に入られている・いないでイジメもあった。高校ではモテる先輩をめぐって女の裏の顔がみえた、あとやっぱいいじめ。友達だった子の物を隠して、笑う姿。意味のわからない理由をつけて自分を正当化する同級生。

たまたま女子の少ないクラス（しかも理系、変わった人が多い）だったから直接被害には合わなかった。でも女はいつまでたっても女社会に出たからといって治る訳ではない。大人になった所為さらに狡猾になるだろう。

何よりもソナウイなら私を悪くはしないだろう、という思いがあっ

た。初対面の者に抱くには危ないのかもしれない。でもそう思っ
いても止められない。

ソナウイはなんとなく笑った気がした。もちろん鳥の表情はわか
らないけど。

「そういえばアオイ、お主は我がどんな姿に見えておるのじゃ？守
り神によって違うんじゃないか」

そうなんだ。私には蒼い瞳の真っ白な巨大な鳥、しかも光っている。
もしかしたらカエルに見えたりする人もいるのかも……。

「神をカエル……。アオイ、考えがダダ漏れじゃと言っただろうが。
……。

とにかく白い碧眼の巨鳥じゃな。うんうん。アオイは眼をもつてい
るようじゃ。あやつもよい仕事をしてくれたのー。よい取引じゃっ
たわ」

よくわからないけどほめられた。考えが伝わるのはちょっと嫌だけ
どソナウイだったらしいわ。

「ねえソナウイ、私、初め卵の中にいたんだけど、どうして？ソナ
ウイが鳥だからなの？」

「ああ、それは向こうの神がふざけたんじゃない。アオイが我を鳥じ

やと眼^{まなこ}でみることができたからよかったが、下手したら火傷すると
ころじゃったわい・・・。」

ソナウイって異世界の神なのに妙なところで日本語知ってるわね・・・。

この世界と私

「まずはそなたの守し国、第4の国シュヴァを説明しようかの。・
・特に特徴もないかのう。王は悪いやつではないのう、ちよつと王妃に尻に引かれてとうが……。問題なしじゃ。あんまり先入観を持つても困るからの。初めに言つたようにアオイの好きなように生きればよい。我は強要は好かんからのう。自由の裏には責任がある。アオイは分かつておろうが、勘違いをする輩は多いからの。言い忘れたがこの世界は ガンデスノーサ という。第1の国 エスク、第2の国 ペイジ、第3の国 ライアン、お主の国の第4の国 シュヴァ、そしてここが神の国 シパーロゼンじゃ。この場所に来れるのは我が認めた者だけじゃ。質問はあるかの。」

うーん。結局名前くらいしかわからなかった。ソナウイの言うとおりに変に先入観を持つても嫌だし、まあいいか。質問か……。あつ！異世界といえば魔法とか精霊とかあるはず。一応神のはしくれ使えるのかなあ……。

「アオイ、きちんと言葉を使ふんじゃ。我が心を読めるからといって楽をしようとするでない。こんな扱いはじめてじゃ（苦笑）。魔法は精霊が使うもの。お主は直接使えん。精霊はほとんどがお主に懐くであろうから代わりに使こつてくれるわ。ただ弱い精霊ばかりじゃからお主が想像しとるような事は無理じゃろうかのう。」

「ありがと。すごい基本的なことだけど言葉は通じる？あと文字とかも。結構重要なんだけど……。」

「もちろんじゃ。文字は地球とは違うが読める。ただ書くのは出来ん。自分の名前くらいは書けるようにしておこうかの。」

そつか。やっぱり王道とはちょっと違うな。守り神ってゆうのは王道だけど、地球に帰れるのは違うし、なによりも魔王討伐とか世界を救うのがない。これは大きな違い。助かったけど。

「ねえソナウイ、私の特殊能力とかあるの？普通の人間が守り神ってゆうのは勘弁してほしいんだけど」

「特殊能力……。我にとっては普通的能力じゃから人間に比べて特殊なものはわからんのう。すまぬのう。」

そつか……。たしかに自分にとって普通のことって指摘されないと違いなんてわからないよなあ。勉強になった。

「ありがと。今のところは質問はないよ。」

ソナウイは頷くと、碧眼を閉じゆつくりと翼を2回動かした。

「シュヴァの神殿に思念を送っておいた。今から守り神を導くとな」

「えっ、今から行くの？」

「我の背に乗るのじゃアオイ。神渡りがはじまるぞ」

連絡する前に私に一言言おうよ。

決意と私（前書き）

多くの人に読んでもらえて感動しています。
感想とか頂けるとすごく喜びます。

決意と私

「ねーソナウイ、私パジャマなんだけど……。さすがにちよつとこの格好で神の使いは……」

ソナウイの背に乗ってシュヴァに向かっていた。初めは落ちそうと怖かったけど案外快適。さすが神？

服装にあんまり拘らない私でもパジャマで家族以外の人に会うのは恥ずかしい。それがお偉いさんならなおさら。常識的に考えても神が寝巻で来たら引くし、どんだけやる気ないねんって関西人でなくとも突っ込んでしまう。

「うむ。アオイの言う“ばじゃま”とは寝着のことか。あちらの服装はこちらの世界ではどんなものか分からん。大丈夫じゃ「心読んだんなら、乙女の恥じらいに気づけ」……そんなものかのう。うん。どんな服にしようかのう。我は派手なモノは好かんからのう、だからといってアオイが侮られるのは気に食わん。

神の使いなら、“風の跡”と“精霊の涙”は外せんしのう。アオイの黒髪に合わせて淡い色……。いや、いつそ白のほうがいかなの……」

ソナウイさうん。あなたの悩んでる姿、今初めてみましたよ。そんな服装は重要なことかな。とりあえずパジャマか全裸じゃなかったらいいけど……。むしろ地味めをお願いします。派手めな女は打たれるってゆうじゃない？ ↑特に女の先輩に

「ソナウイ」。どんなんでもいいよ。それより 風の跡と精霊の涙ってなに？ 名前からしてなんかすごそう」

「しばし待て。・・・うむ。私の考えはまとまった。アオイ驚くでないぞ」

ソナウイが言うのと同時に私は光に包まれた。

次の瞬間には私はさっきのパジャマ（ユニ。口の¥1980）から、まっ白いワンピースに光の加減で色の変わる半透明なシヨール、耳には不思議な色の石ピアス、ネックレスはシンプルな一つ石のもの。肩くらいの長さの髪は一つにまとめられ、髪飾りも付いている。この小物類はすべて同じ石が使われている。青にも赤にも時には黒にも見える石。

うん。想像していたよりはシンプル。想定内でよかった。

「気に入ったようじゃの。“風の跡”とはそのシヨールのことじゃ。私の羽毛を使うておつての。常にアオイを守ってくれるぞ。気候変動にも強く、攻撃もすべてはじき返すのじゃ。“精霊の涙”とは、その石のことじゃ。精霊の力を凝縮させて作ったものじゃ。我が国に遊びに行くとよくくれるのじゃ。我には必要ではないのでアオイは気にするでないぞ。奴ら（精霊たち）もお主がつけておつたほうが喜ぶじゃろう」

ソナウイへのプレゼントと知って遠慮しようとしたのに先を越された。こう言われると断り切れないじゃない。

「ありがとう、ソナウイ。守り神としてどこまでできるかわからないけど精一杯努力する。」

「それでいいのじゃよ。わからない事は悪い事ではない。はじめから出来る者などおる訳がなからう。分からなければ分かるように努

かし、知らないならば知ればよい。分からない事を侮る奴がいれば、
そいつが愚かなのじゃ。」

真下には白い建物が見え始めた。

決意と私（後書き）

裏設定

精霊の石：すごく高価。王族でも一部の人（トップ付近）しか持てません。

シュヴァと私

少し前

神殿の中心部、神の座に声が響いた。

「守り神が誕生した。名はアオイ。今から我　ソナウイが第4国に連れてまいる。」

神殿では皆、耳を疑った。守り神が誕生した。そこまでは理解出来る。喜ばしいことだ。先代の守り神は10年前に崩御された。国中が待ち望んだ守り神の誕生だ。

問題はそこではない。創造主ソナウイが連れてくる？創造主は滅多に姿を現さない。たとえ守り神が崩御されてもそれは変わらない。記録に残っているソナウイの姿は1000年前だ。それも一瞬のことであったそうだ。

その神がこれから神殿に降臨なさる。守り神を連れて。

その後の神殿は大パニックであった。もともと神官になるものは喜怒哀楽が少ないものが多い。そんな者たちが冷静な行動がとれず、あちらこちらで大声を出している。たまたま神殿に来ていた王と王妃は　明日は雨かしら　と呑気であった（神の声は神官にしか聞けない上に神が話す事自体が稀）。

「静まりなさい！！創造主が守り神を連れて降臨されるのです。皆失礼のないように心を落ち着かせなさい。今日は王夫妻が参られています。王太子殿下に神殿にお急ぎ参られる連絡を。万が一にも失礼があつてはいけません。身支度を整えた者から神の座に集まりな

さい。」

薄い赤髪・空色の瞳の青年は言った。神官長のカインである。若干20歳で現在の地位まで登りつめた。3年たった今でも能力は伸び続けている。彼は神官たちの中でも特に喜怒哀楽が少なく、また欲もなかった。カインの言葉を聞いた神官たちは、一斉に自分を取り戻し各々動き出した。

カインは王夫妻に状況を説明するために振り返った。

「王、王妃。今聞かれた通りにございます。創造主ソナウイが守り神をお連れになって我が国に向かわれています。至急ご準備を」

王夫妻は驚きながらも王宮に戻った。王といってもそれは人の頂点に立つもの。神の前では何の身分もない。

カインは王夫婦を見送った後、自信も着替えるために自室に戻る。

普段着ているものより数倍上等な神官長服に身を包み、神の座へ向かった。

「ねえソナウイ、あれが王宮？すごいみんな走ってるけど・・・」
私は下を見ながら聞いてみた。真下に見える建物では多くの人が走っている。見た感じだと若い人ばかりか明らかに60過ぎた人まで徒競争なみに走っている。今日は運動会の日だったのかなあ。邪魔

したら悪いな。

「あれは神殿じゃよ。あそこがお主の城じゃ。今から神殿に降りる。我はお主を下すとすぐに帰るからそのつもりで。・・・そんなにさみしそつにするな。すぐに遊びに行くからのう。あまり我は人前に出んからの。この国にあまり長く滞在すると他の3国がうるさいんじゃよ、辛抱してくれ」

私はとりあえず納得した。さみしいけどソナウイと二度と会えないわけじゃない。それに自分で引き受けた仕事？だもの。とりあえず初めが肝心！気合いを入れなくっちゃ。

いよいよ神殿に降り立つときソナウイは私に言った。

「アオイ、私の可愛い守り神。そなたに贈り物をしよう。そなたにぴったりの贈り物じゃ。今度会うときに感想を教えておくれ。

忘れるな。我はいつまでもお主の事を見守っている。神が後にいるのじゃ、自信をもて。アオイのやり方でこの国を守っておくれ」

ありがとう、ソナウイ。私にチャンス을くれて。正直あのままあつちの世界にいても、努力することなく人生終わっていた。私自身したい事なんてなかった。いやいや働いて、夢なんて見る暇もなくてきちんと働いている人には失礼だけど。

私は平凡で、何の取り柄もないけど地球の神は私を選び、ソナウイは私に守り神というチャンス을くれた。この国で私の役割を果たそう。せつかくのチャンス、ものにしないと！

私は振り向いた。みんな土下座？をしていた。

ソナウイさん。やっぱり戻ってきて。状況を説明して下さい。

シュヴァと私（後書き）

私、関西の人間です。文章読みにくかったらすみません。

カインと私1（前書き）

学校が休みのためハイスピードで更新します。

カインと私1

ソナウイはもうシパーロゼン（神の国）に戻ってしまった。うん。どうしよう……。めっちゃ土下座。おそらく100人以上いるのに全員土下座。この人たちは土下座人数でギネスでも狙っているのか。いや、もしかしたらこっちの方向にメツカでもあるのか。それなら仕方がない。宗教は学校で習っている。宗教関連はデリケートだ。仏教徒であり、無教徒の私は口出しできない。……。この国にもイスラム教ってあるんだ……。

おいおい、ちょっと長いんじゃない。立つてるのに疲れてきた。

なに、もしかして私が「面をあげーい。近こっ寄れ」的な発言をしないといけないの？二十歳すぎてその発言は痛いんじゃない？守り神がこの世界でどうゆう位置にいるのか分からないけど、私個人の感覚では会社員。社長に雇われた社員（私）。

「あのー私が守り神のアオイ・イナバです。……。反応を返してもられますか」

勇気を出してあいさつしたのに、反応はシーン……。顔さえ上げてくれない。イジメなのか？。転校したことないけど初日からこんな反応なら、次の日から登校拒否してしまうだろう。つい言ってしまった。反応してほしいと……。

土下座衆、一斉にビクツと肩が動いた。あれ、なんか怯えさせてしまったのか。何も考えずに口から出た言葉。深い意味などある訳ない。

なぐんてね 冗談だよ と言えない雰囲気。

雰囲気伝えるなら、大会社の社長のズラが偶然落ちた時みたいな。

ものすごく気まずい。ホントに気まずい。

「恐れながら申し上げます。守り神のご不興を買ってしまい誠に申し訳ございません。誓って守り神を侮ったわけではございません。さきほどの 創造主ソナウイ のご降臨に感激をいたしておりますた。

守り神 アオイ様、貴殿の誕生を全国民が心待ちにしております。国民を代表して、第4の国シュヴァ 神官長カインが祝辞を述べさせていただきます。」

薄赤髪の空色の青年が顔をあげて言った。よかった。1人は反応してくれた。

大学の○教授、講義中、学生の反応が無いって怒っていたけど・・・
気持ちが始めて分かった。ごめんね先生。今度から(たぶん無いけど)きちんと反応します。

カインサイド

神の座に光とともにすさまじい神力が広がった。力の無いものは意識を保つに必死だ。王・王妃・王太子は私の結界の中にいるため意識はある。しかし王太子はつらそうだ。

生まれて23年。これほどまでに力の差を感じた事はなかった。先代守り神に感じたものとは比べ物にならない。これが創造主 ソナウイの力。しかも神は力をほとんど使っていない。守り神を連れてきただけなのだ。

1000年前のソナウイの降臨は、国が神に背きあるうことか守り神を殺した事が原因だ。一瞬の降臨で、守り神を殺した者・命令し

たもの・止めなかったものすべてを文字通り灰にした。幼い王子を残して王族はすべて消え、官吏は良心があるものだけが残った。神にとって一瞬で行動を起こすことは容易なことである。

光の中、碧眼が見えた。優しく守り神をみつめている。守り神は碧眼に対し、頷いている。そして次の瞬間、光は急速に消えていった。

忘れるな。我はいつまでもお主の事を見守っている。神が後にいるのじゃ、自信をもて。アオイのやり方でこの国を守っておくれ

神の声が聞こえた。王の様子からして、力の有無にかかわらずこの場の者すべてに聞こえたのだろう。守り神に対しての優しい心使い、そして我々に対しての牽制。

少なくとも神官たちは守り神を全力で守るだろう。もちろん私も。

そんな事を考えていると時間がたってしまった。守り神の声にも反応が遅れてしまった。

「あのー私が守り神のアオイ・イナバです。・・・反応を返してもられますか」

守り神のご不興を買ってしまった。私はあわてて言った。

「恐れながら申し上げます。守り神のご不興を買ってしまい誠に申し訳ございません。誓って守り神を侮ったわけではございません。さきほどの 創造主ソナウイ のご降臨に感激をいたしておりますた。

守り神 アオイ様、貴殿の誕生を全国民が心待ちにしておりました。国民を代表して、第4の国シュヴァ 神官長カインが祝辞を述べさせていただきます。」

アオイ様はじつと私を見ると、少し微笑んだ。大輪が咲くような笑顔ではなく、本当に小さく微笑んでいた。

今思うと私はその微笑みにすでに囚われていたのだろう。

カインと私2

その後、王さま（ググロさん）・王妃・王太子（スタル君）と挨拶をした。カインに対しても思ったけど美形率高くね？、異世界の王道だね

後の神官さんたちは・・・うん。普通だね。仲間がいたよ、ソナウイ。

とりあえず私はカインに連れられて王宮に移動した。挨拶の後はまず神官長のカインの説明を聞いていた。半分以上は脳で感知されることなく反対の耳から出て行ったけど。

王宮での私の扱いは最上級の賓客だそうだ（神殿では主）。神の使いという事で王と同席を許される。ちなみにカインは神官長という事で王太子レベルの地位。神官スゲー。

「ようこそおいでなされた、守り神よ。末長くこの国を愛し、お守り下さい。わららシユヴァの民は歓迎いたします。」

「ありがとう。人の王。我は創造主ソナウイの声を民に伝え、民の声をソナウイに伝えよう。我が生きる限りこの国を愛し守ろう」

舌を噛みそうになりながら言った。カインが教えてくれた文章はあと2、3文あったけど放棄しました。噛んで恥かくより、コンパクトにしたほうが格好がつく。ええ格好しいは嫌いよ。

とりあえず公式の場でのあいさつは終わりらしい。夕食の前に王族

やら貴族やらを紹介されるそうだ（ちなみに今はお昼くらい。お腹すいた・・・）

王宮を出るときに嫌な視線を感じた。何だろう、すごく粘っこい視線。視線の先を向く前にカインが間に入った。神官すげー（本日2回目）

ちなみにこのカイン、最年少神官長でエリート街道まっしぐららしい。今は私のお世話係をしてくれています。表情はあんまり変化しないけどなんだかソナウイみたいで安心する。

「ねえカイン、ちょっとお腹すいたんだけどなんかつまめるものってある？」

カインに聞いてみた。カインは、はっとすると小声で呪文？を言った。

「申し訳ございません。すぐに用意させております。もうそんな時間なのですね」

カインは苦笑して私に謝った。うーん、明らかに年上の人に敬語を使われるのはなんだかむずむずする。しかも私がため口・・・（初めに敬語を使ったら拒否された）。

「カインに命令します。ちなみに撤回は出来ません。敬語は公式な場以外では禁止します。なぜなら私が嫌だから！文句ある？」

カインは空色の瞳をこれでもかという位開き、高速で首を振った。

「アオイ様は神でございます。私は一神官。そんな失礼な事は出来ません」

「私の耳、今日はお休みなの。しかもさっき言ったよね、撤回はできないって。あきらめてー。もしあきらめきれないなら・・・カイン様とお呼びしても「分かった・・・。敬語はやめよう」ありがと

う」

WIN：アオイ・イナバ

イエーイ

こんな話をしていたら神殿についた。私の部屋？はなんと離れ（守り館というらしい）がひとつ。すごい扱い！カインは昼食の用意はしてあるといった。

食堂に入るとすごい量の食事が容易してあった。ざつと見ると5、6人前。ギャル。根じゃないんだから。

料理はヨーロッパ風の日本料理。よかった・・・ゲテモノ系はお酒なしでは無理でした。

「アオイ様、どうぞお座りください。」

「あれ？カインは食べないの？こんなに1人では食べられません。あと敬語やメロ」

1人のご飯は案外さみしい。しかも知らないところで。たぶん周りにお姉さんやお兄さんたちがウェイターよろしくお世話してくれるのだろっけ。

「私ごとが一緒に食事できま・・・カインさ一緒に食べようか、アオイ」

「初めからそう言えばいいの。あと私、食事のお世話とかいらないから下がっていいよ。食べ終わったら呼ぶから」

「アオイ、何を言いだすんだ！神が働くなんて・・・（絶句）」

「そんな世界が滅びるみたいな顔すんな。働くっていったって、スーブを入れるとかだし。大げさな・・・将来禿げるぞ」

「ハゲ・・・！！お前たち、守り神の仰る通りに。」

「・・・畏まりました。失礼いたします。」

周りの人たちはびっくりした顔で私たちを見ていた。後から聞いた

話ではカインがここまで感情を出しているのに驚いたらしい。守り神は結構自由らしくて、私ほどではないがくだけた人が多いため私自身については驚かなかったらしい。

カインと私2（後書き）

アオイさん結構強引です。

カインと私3

料理はおいしかった。お腹もすいてたし、何より味付け！まったく辛い。私はワサビとか唐辛子とか大の苦手。小学校の時点で給食のカレーは辛すぎてきつかった。激辛料理を食べる人はDMだと確信している。

カインは不服そうだったけど無視無視。一人より二人のほうが絶対ご飯はおいしい。

食事がひと段落して、食後のお茶を二人で飲んでいた。うん。このお茶美味しい。ちょっと緑茶ぽいけど香ばしいし。お腹もいっぱいだし、これはお昼寝するしかないね

「アオイはどうして私と昼食を共にしようと思ったのだ・・・？」

急にカインが聞いてきた。敬語はもう使わなくなった。よしよし良い傾向だ。

「どうしてって・・・1人よりも誰かと食べた方がおいしくない？ あっ・・・ごめん。こっちにはそうゆう風習ないの・・・？」

もしそうなら悪い事したな。もっとこっちの事勉強してから言うんだった。

「いや、そういう事ではない。こちらでも友や家族で食事とともにする。私が言いたいのは・・・私が気味悪くないか？私のように赤い髪の間人は稀だ。親でさえこの色を嫌った。血のようだと言う者もいる。ここの神官たちはそうではないが、一般にみてもあまり

好かれる色ではない。」

質問をしたカインの方が驚いていた。なぜ自分はこんな質問をアオイにしたのだろう。あつてまだ半日もたっていないのに。たとえ守り神であつてもこんな自身の事を話すなんて……。普通の少女に見える守り神。もし創造主が連れてこなければ気がつかなかったであろう。それくらい平凡な少女。少し強気で、王宮での決まり文句でさえ、言えないと勝手に文章を短くした。流れに支障はなかったが、すごい度胸だと呆れた。

「え、カインの髪の色キレイだと思うけど……。夕焼けみたいだし（何より天然って感じがする。イキがったガキの色とはちがうわ）。サラサラのまつすぐ。羨ましい……。私は癖っ毛だからすごい広がるし、それが嫌。人それぞれ悩みがあるのね。」

私はカインの髪を触ってみた。ホントにサラサラ。CMで見るあのサラサラって感じ。天使の輪っかももちろんある。今私は、ソナウイ仕様の髪をうしろでまとめているから分かりにくいけど、梅雨の時期とかは悲惨。膨らむわ、跳ねるわ、爆発するわ。跳ねるのも内向き・外向きならいいけど、左右ともに右に向いてたら最悪。どんなけなびいてんねん、もしくは妖気感じてマスみたいな感じになる。

いやーホントにサラサラ。三編みで寝たら次の日カールしてるのかな……。いや案外すぐにまつすぐに戻りそう。三編みかぁ、挑戦は大事よね。23歳 男の三編み。文章でみたらキモいけどカインなら似合いそう。

若干変な事を考えず、カインの髪を触っていた私なのでした。

カインサイド

アオイは私の髪をキレイだと言ってくれた。何よりもすぐに髪質の話をし、なんでもないように言った。誰でも悩みはあると。アオイは意図せずに行ったに違いない。しかし私には衝撃は強かった。幼い頃から赤い髪だという事で云われない差別を受けてきた。気持ち悪い、不吉なもののように扱われてきた。神殿で生活するようになってもそれは変わらなかった。もちろん神官たちは親や村人のように邪険に扱う事はなかった。しかし、やっぱり浮いてはいた。赤い髪の不幸な少年。同情心で接する神官もいた。

神殿には友もいる。あやつらは私をカインとしてみてくれる。しかし、カインとして見てくれるまでに時間がかかった。私自身が感情の起伏が少ないのも原因の一つだが。

アオイは違った。赤い髪のカインではなく、カインを見てくれた。アオイにとつて色よりも髪質が気になるらしい。自分は癖があると私からしたら可愛らしいものだと思うが……。そこで気がついた。誰よりも赤い髪に固執していたのは自分であつたと。私がアオイの髪に感じるようにアオイが私に感じる赤い髪など些細な事なのだと心底笑いたくなった。愚かな自分に。そして気がついた。なぜ、アオイにこんな話をしたのか。それはアオイに受け入れてほしかったから。あのアオイの微笑みをみた瞬間から私はアオイに魅せられていた。今、私の髪を触っている愛しい守り神に。

創造主 ソナウイよ。アオイを守り神としてこの国に、導き本当に感謝しております。私はどんな事があってもアオイを守りぬきます。

使用人たちは、まったく違う種類の笑みを浮かべるアオイとカインの様子をメモに取りながら観察していました。そしてその日の午後にはメモは報告書となって神官長補佐の所まで提出されました。

もちろんこの神官長補佐はカインの悪友です。

「おいおい、カインてば面白いネタを提供してくれるねー。これで1週間は笑えるぞ」

カインと私3（後書き）

本人自覚なしですが、カインはみんなから好かれています。

王様たちと私

夕食は守り神の祝賀会だった。私はソナウイ仕様の服だから結構地味めだったけど、すごい人はすごかった。どっかの姉妹みたいに身体の線を強調した人や宝石をつけまくっている人もいた。

カインから改めて紹介されました。

まずは王さま。ググロ・サマリケル・シュヴァさん。金髪に緑の瞳。いい人そうなおじさま。ちよつと奥さんの尻に敷かれてました。二人は幼馴染みたいでとっても仲が良かった。

次に王妃さま。セシア・アーガイル・シュヴァさん。ググロさんと年齢は変わらないはずなのに見た目は20代後半。ググロさん曰く年齢の話をするときついらしい。ちよつときつめの美人さん。ブラウンに近い金髪に赤黒い瞳。服装は結構シンプルなのに存在感がすごい。そして最強オーラが出てマス。姐さんって呼びたくなる。

王太子のスタル・ロバートソン・シュヴァ君。19歳。なんだか王妃様の少年（明るい金髪。王さまからの遺伝？）バージョン。ちよつとアホ。天然ゆえのKYな所以外は有能な王太子らしい（カイン情報）。私に対してもKYな発言がありました。

「アオイ様はそのようなお歳で、神の使いなど大変ですね。我らの国では考えられません。」

「いやいや、王太子は働いているのですよ。」

「私はもう19歳ですから。アオイ様のお歳の頃は遊んでいましたよ。」

「・・・カイン。ハリセン持ってない？・・・ないのか。」

このアホ王子！私はもう20歳だ！！あんたより1歳年上だ」

・・・会話が聞こえた周囲のみなさん、そんなに驚いた顔しないで

下さい。あつセシアさんだけが目を輝かせてこつち見てる。絶対あとで美容方法とか聞かれそう……。東洋の神秘とでも答えておこう。

呆けたカインを正気に戻して次の人を説明してもらった。

宰相のキロイ・ブルジン・アーガイルさん。セシアさんのお兄さん。そう言えば色の配色が同じだ。もちろん王さまとは幼馴染。でもやつぱり王さまよりも強気。趣味は王さままで遊ぶことらしい。すっごい有能らしい。

騎士団長のオリーブ・サイプロ・シモンズさん。70歳のお爺さん。なんだけど筋肉ムキムキ。顔は強面だったけど優しい人だった。代々の王族に剣術を教える家系で王も王太子も教えてもらったらしい。私の事を嬢ちゃんと呼ぶただ一人の人。

おいしい料理を食べながら、貴族たちを観察していた。明らかに厭らしい目で見える人、好奇心たつぷりの目で見える人さまざまだった。要するに私に注目をするけど王さまたちが近くいて、自分からはいけないから私から来てほしいな。って所でしょ。だれがいくか。特にロリコン親父のところには！

祝賀会も中盤に差し掛かった時、急に人々がざわついた。一体何があったのだらうと顔をそちらにむける。視界の端で王妃さまが顔をしかめたのが分かった。

「ごきげんよう、守り神。わたくしはシャロー・スノウデン・ガイザー。以後お見知りおきを。あら、セシアったらこんな所にいたの？本当にあなたは鼻が利くのね。羨ましいわ。わたくしもあなたの

ように身分に関係なく浅ましくなれたらよかったわ」

シャローさんは厭らしく笑った。確かに見た目は美しい。銀の髪に、紫の瞳。妖艶な身体。全くそれを隠そうとしない服装。でも心は汚い。真つ黒とかじゃなくていろんな色が混ざった汚い色。あー私の苦手なタイプだ・・・。

「こんにちは、守り神さま。私は第二王子のバローズ・サシキス・シュヴァです。あなたのような可憐な神なら、信望者は多いでしょうね。もちろん私も喜んでこの身をささげましょう」

バローズはニヤツと笑うと私の甲に口づけた。ものすごい速さで鳥肌が立った。顔は悪くない。むしろ美形に入るだろう（スタル君には負ける）がなにかGを思い出させるものがある。一刻も早く手を洗いたい。

「王女のラトメ・フルキサス・シュヴァよ。あなたが守り神？なんだか地味ね。創造主は何を基準であなたを選んだのかしら？少なくとも美しさや気品ではないでしょうね」

上から目線のこの小娘。絶対母親似だ。違うのは目の色だけ。後はほとんど同じ。

シャローさんはたぶん側室なんだろう。自分では言わなかったけど、さっきの言い方からしてセシアさんよりも実家の身分が高かった。でも王に愛されなかった。だからセシアさんを憎んでいる。王妃は自分よつと言いたいのであろう。

王がどうしてそうしたのはかは知らないが、その選択はあっていないと思う。この人たち生理的に受け付けない。

私は早くこの場を去りたかった。めんどくさいものには関わりたくないもの。カインにそう伝えようとして傍らの彼を見上げた。・・・鬼がいた。

カインはにつこりと笑った。でも笑っているのに空気は凍っていた。「側室さま（強調）、祝賀会に遅れてこられた理由は何ですか？まさか創造主さまが直々にお連れになった守り神様の祝いの席に遅れておいて謝罪もなしとは驚きました。しかもアオイ様の前で王妃さまに話を振るとは……。アオイ様がいつあなたに発言を許しましたか？そもそも昔はともかく今はセシア様が王妃、あなたは側室、身分はあなたが下です。お言葉使いにお気をつけください。バロース殿下、アオイ様は周囲の女性とは存在が違います。創造主が寵愛された守り神。許可も無く触れるとはどんなご了見があったのでしょうか？あなたの考えが足りないのは知っておりましたが、ここまでとは……。恥を知りなさい。」

ラトメ姫、あなたは何を勘違いなされているのですか？守り神を選ぶのは創造主ソナウイであってあなたではない。そんな事は幼児でも知っている。それをこのような場所で仰るとは……。ご自分の無知をさらしているようなものです。あと、私個人の意見ですが、アオイ様とあなたを比べる事自体が間違っていますよ。なぜならアオイ様の方がすべての分野で勝っております。」

カインは最後にもう一度につこり笑った。ちなみに多くの人に聞こえるように若干大きな声で言った（腹黒い）。

シャローさんは、一瞬あつけにとられていたけどすぐに顔を真っ赤にして怒鳴り返した。隣で王子と姫も真っ赤な顔でカインを睨んでいる。

「おのれ神官の分際で、わたくしたちに何とゆう無礼を！！不吉な赤髪よ、今すぐに謝罪しなさい！！」

「側室さま。何度も言うようですが、あなたは身分というものをご理解されていない。私は神官長です。神官長は王、王妃に次ぐ地位、

王太子と同じ発言権があるのですよ。この意味がわかりますよね。」
シャローさんは絶句すると、速足でその場から逃げていった。もちろん王子と姫も連れて。

カインは何もなかったように私に笑いかけていた（さっきとは違うホントの笑み）。カインってすごい黒いんだ……。今日のお昼みたいに喧嘩売るのはよそう。私は心に誓った。

王様たちと私（後書き）

腹黒カイン様降臨。

王様たちと私2

腹黒カイン様降臨で場の雰囲気はおかしなものに変わった。カインは何事もなかったようにしている。私もまあ同じ。問題は・・・王妃さまと王太子、さらに宰相のキロイさんと騎士団長のオリーブさん。さらにカインが私の甲を無言で聖水まで使って清めるから余計に彼らを刺激してしまった。

「ぶつつつつ、ダメ！！我慢できない！！最高ねカイン、すつきりしたわ。あのシャローの顔といたら・・・ダメ、思い出したらお腹が・・・」

笑いすぎてセシアさんはフラフラしている。そんなセシアさんを王さまは支えている。やっぱり上下関係が見える。

王太子のスタン君は床に這いつくばっている。ツボに入ったらしい顔は酸欠で赤くなり、髪もぼさぼさだ。おいおい、美形が台無しになってる。

キロイさんとオリーブさんは堂々と爆笑していた。セシアさんのように我慢する気は全くない。この騒ぎを知らなかった人まで2人の笑い声でこちらに注目している。

「ねえカイン、この人たちっていつもこんな感じなの？」
「・・・そうだな。だいたいは」

ソナウイが言った通りいい人ばかりなのか・・・いや、国のトップがこれってちょっと・・・。まあいいか。平和が一番。

私は1人納得していた。だってなぜ王妃がここまで笑ったのか、貴族がそして王が止めに入らなかったのか疑問にすら思わなかった。この王族たちの過去を全く知らなかった。過去、王妃の涙があった事、失われた命、深すぎる後悔があることを。

「あの汚らわしい赤髪め、忌々しいあの女の前で恥をかかせおつて。バロースが王になった暁には、さらし首にしてやるわ。そしてあの女にはこの世の地獄をすべて見せてやる」

シャローは自室に戻るとそう吐き捨てた。王や新しい守り神の前でセシアに恥をかかせたかった。あの卑しい女はいつも私から大切なものを奪っていく。初めは王を奪い、さらに女としてのプライドまで奪われた。本来なら私がこの国の王妃であつたのに……。いやまだ遅くない。あの邪魔な王太子さえ消えれば。何、簡単なことだ。1人殺すのも2人殺すのも同じ事。

そうよ。この国の正当な後継者はわたくしの息子。あのような中流貴族の血が王家にあつてはいけない。わたくしのように高貴な者でなければいけない。

「可愛い私の子供たち。母のそばにおいで・・・」
シャローは二人の子供を呼んだ。2人はすぐに母親のそばに行った。

「バローズ、あなたは次期国王。いまは忌々しいセシアの息子が王太子の地位にいるが問題はない。安心なさい。スタンはもうすぐ消えるわ。レニユーのように……。本当ならこんな事をせずとも王座はあなたの物。あの卑しい女の息子に奪われただけ。あなたは何の心配もしなくていいのよ。母のいう言う通りにしておけばすべてが終わるわ。」

ラトメ、美しく賢い私の娘。あなたは自分が守り神に相應しいと考えていたみただけどそれは違うわ。守り神は所詮、神の人形。あなたはあの娘よりも賢く美しい。あの程度の者が神の使いならば、なんとちんけなものか。あんなものにあなたがなくて本当に安心しているわ。本来なら王妃の娘として堂々と生きるべきなのに今は側室の娘として扱われる屈辱に耐え、母を責めない優しい子。もう少しの我慢です。」

「お母様……」

兄妹は母の慰めで先ほどの怒りを鎮めた。

「そのためにはあの守り神は利用出来るわね……。」

シャローはアオイを思い出し、つぶやいた。紫瞳に怪しい光を灯しながら……。

コレトと私（前書き）

新キャラ登場です。

コレトと私

祝賀会も終わり、私はカインと一緒に神殿に戻った。ちなみにスタン君はあの後、笑いすぎが原因で呼吸困難を起こして召されかけた。おいおい、どんだけ馬鹿なんだ王太子。

とにかく、無事この世に戻ってきたスタン君は“奇跡の王太子”という名誉な二つ名を与えられた。真相を知っている人たちからしたら爆笑ものだし、スタン君からしたら恥でしかない。基本この国の人はSなのだろう。

くだらない事を考えていると神殿についた。カインは口数があまり多い方ではないみたい。ほとんど会話はなかった。まあ、マシンガントークをされても困るけど。

神殿を歩いていると、前から男の人が歩いてきた。私の身長が160?、カインが弟と同じくらいだから・・・180?くらいか。そのカインよりも大きい。ここの国の人は無駄に背が高いと思う。王宮でも思ってたけどカインはたぶん平均くらいだろう。日本では平均くらいの私では見上げなければいけない人も多くいた。その筆頭はソナウイだったけど。

「コレト? なにかあったのか?」

カインは男に話かけた。カインの知り合いか・・・。それにしてもでかいな。首の筋肉が鍛えられるよ。

「いや、何もない。噂の守り神をお迎えしようとな。」

はじめまして 守り神 アオイ様 私は神官長補佐をしておりますコレトといます。そこにいるカインとはかれこれ10年の付き合い合

いになります。知りたい事があれば何でもおっしゃってくださいね」
「カインのお友達なんですね。始めまして守り神のアオイ・イナバです。敬語は苦手なので出来ればもう少しだけしてほしいのですが・・・」

「うん。カインが睨んでいるのでそれは・・・。まあ軽めの敬語にしますね」

なぜカインが睨むのか分からないけど、今日の彼をこれ以上刺激して、腹黒カインを降臨させたくない。とりあえず納得した。

「そういえばカインもコレトも名前だけなのね？ほかの人みたいにいろいろ付かないの？」

初めは身分とかあるのかなあと思っていたけどカインは王太子と並ぶ身分。それは無いだろう。

「神殿では家柄など関係ないからな。完全なる実力社会だ・・・何をしているコレト」

コレトさんは泣きながら神殿の廊下で悶えていた。まるで王太子のように。

「おいおい、カインがしゃべった。しゃべったぞー」

まるで。イジが立ちあがったクラ。をみて叫んでいるようだった。

大きな違いはコレトさんは爆笑している事。

カインは無言でコレトさんを踏むと私を守りの館に連れていこうとした。そう、手をつないだのだ。私自身何も気にせずに守りの館に行こうとした。そしたら

「あはははー、あ、明日は紅茶が降るー、あはははは、腹いてー、カインのご乱心だー、カインの成長、カインの一步、カインと私の

ランデブー、ブハっ、死ぬ「では死ぬ」カインと会話するー」

コレトさんはネジが何本か抜けてるのだろう。さっきから意味の分からない事を言っている。とりあえずあの人はカインが大好きなのだろう。会ってから5分も立っていないのにカインって言葉を8回も言っている。

ようやく守りの館についた。お風呂とかトイレの説明はお昼のうちに受けたし、たぶん大丈夫。メイドさんたちにはお世話はいらないって言っている。

「カイン、コレトさんはいいの？」

「ほうっっておいて問題無い。アオイ今日は疲れただろう。ゆっくり休め。何かあったらすぐに呼ぶのだぞ」

「うん。了解しました。カインもお疲れさま。お休み」

ベッドに転がりながら、今日1日を思い返してみた。平凡な大学生の稲葉碧から始まって、ソナウイと出会って、守り神アオイになって、シュヴァに来て、カインとか王さまと会って……。こんなに濃い1日を過ごした事があったのだろうか。異世界だからといって不安になることは無い。元々1人暮らしたし、あっちの世界には好きな時に帰れる（らしい。まだしたことないけど）。場所が変わっただけで状況は何も変わっていない。

明日も明後日も今日みたいに新しい事ばかりなんだろうな……。不安だけどころかなくなるだろう。

そういえばソナウイの言ってた贈り物って何だろう……。眠りにつきながら考えた。

その頃のコレトさん

カインのお仕置き中。カインの仕事をすべてやってます。カインの仕事は減って明日アオイと一緒にいれるしコレトに仕返しも出来る、とカインはご機嫌に自室へ戻っていった。

「いやーあの報告書以上に面白かったぜ、あそこの使用人は最高だな。臨時ボーナス決定だな。あー腹いてー。これからも報告書をと。（カインの代わりに判子を押す。職務乱用）

アオイ様かー、あの欲なしカインがどこまで変わるか期待してますぜ。」

コレトもカインを心配している1人である。カインの生い立ちも知っている。元々の性格もあるだろうが、あの無表情ぶりは気になっていた。喜怒哀楽が極端に少なく、特に喜ぶ事は滅多に無い。3年前に神官長に決まった時でさえ表情は変わらなかった。10年以上の付き合いなのにカインが笑った所は見たことが無いのだ。それが、今日会ったというあの少女が引き出した。期待するなというほうが無理だろう。カインの仕事をしながらコレトは守りの館を見た。

コレトと私（後書き）

シャローさんが何かする前にアホ王太子は天に召されかけました。

ソイと私（前書き）

多くの人に読んでもらって感動しております。

ソイと私

異世界1日目は忙しかった。普段の生活と比べるとホントに凄い。普段はギリギリまで寝て朝ごはんを食べ（もちろん朝はご飯！お茶漬け）、講義を半分寝ながら聞いて、友達と喋って、お昼を食べ（一番豪華！ビバ学食）、やっぱり寝ながら講義を聞いて、家に帰って、テレビを見ながら夜ごはん（気分によるけど殆どチャーハンかお弁当）。そのまま寝るかテレビを見るかで1日が終わる。それが今日は・・・一回も昼寝が無かった！！奇跡が起こった・・・たぶん生まれて20年。こんな日は初めてだ やればできる、私。

とにかく疲れていた私はぐっすりと寝ていた。枕が変わろうが、環境が変わろうが、世界が変わろうが私の睡眠を邪魔出来るものはない。

INアオイの夢

「・・・イ、・・・ア・・・、イ・・・、・・・アオイ・・・起きろ、アオイ」
「うん、・・・起きた・・・、さようなら、グー」

「アオイ、いい加減に起きないと“暴君ハバネ。”を口に入れる「やめてー！起きます。二度寝も三度寝もしません。きちんとお布団さんと別れます。彼は悪くないの！！私が勝手に好きになった・・・」

「・・・ソナウイ？」

恐ろしい脅迫によって、私は目が覚めた（夢の中なので表現はおかしいが）。あのお菓子は名の通り本当に口の中で革命を起こす。いや、革命なんて優しいものではない。あれは宇宙からの攻撃なみだ。人類滅亡計画の最終兵器並の威力がある。暴君の被害は口の中だけではない。喉・食道と攻撃を受ける。そして攻撃の時間も長い。昔、DSな姉によって攻撃を受けたがまさに私の体は地獄絵図だった。思い出しただけでもなんて恐ろしい。

今回は誰の攻撃？あの人（お布団さん）と私の中を引き裂こうとするなんて・・・。あれ、この声はソナウイっぽい。

「そうじゃよ」。アオイ、目を開ける。ここはお主の夢の中じゃ。ちよっとお知らせがあつてのう。早く我の姿を見ておくれ」

「・・・ソナウイ。白いオオカミだっけ？確か鳥だった気がするけど・・・」

「この姿は我の下界での姿じゃ。この姿でお主に会いに行くのじゃから一度紹介しようとな、アオイよ。我のこの姿に名前をつけておくれ。」

ソナウイ、オオカミになっていた。身体は白くて碧眼の。ここは鳥姿と一緒に。

やっぱい。めちゃくちゃ可愛い。私は動物、特に犬が大好き。あのピンツと立った耳、つぶらな瞳、そしてキュートなしっぽ。鼻血が出そう・・・。

「ソナウイ、ホントにいい仕事するね ツボが分かっているとゆうか・・・ホント最高のチョイスだわ。」

あ、名前ね・・・そうね、ソイがいいな。ソナウイの初めと終わりを取ってソイ。あとタイ語で脇道って意味の言葉。ソナウイが大きな道路なら私は脇道だから。ソナウイと国を繋ぐ脇道。あつてもそれじゃあソナウイにソイは変か・・・」

「アオイ、良い名前をありがとう。国を繋ぐ・・・すばらしい意味じゃ。我が下界に行くのも神の仕事からはそれである。あながち間違っではおらぬ」

ソイは本当に嬉しそうに言った。

珍しくまともな事を言った私だけど、ソイの言葉を半分以上聞いていなかった。正しく言えば初めのアオイくらいしか聞いていなかった。なぜなら私はしっぽを揺らすソイの可愛さにノックアウトされていたのだから。

「そろそろお主の夢からお暇いひやすしようかの。お主も疲れておろつ。ゆっくり休め。そういえば贈り物にお主はまだ気づいていないようじやから、感想はいいぞ。」

「そうなんだ・・・。なら楽しみにしてる。」

ソイ、お願いだから今度からもう少し優しく起こしてね。じゃないと心臓が耐えれない」

「了解した。・・・暴君ハバネ。とは何なのじゃ？お主の記憶に出てきたから使ったのじゃが・・・」

「あれは悪魔の食べ物・・・。食べると火を噴くわ。そして舌が痛くて痛くて・・・」

私はあの痛みを思い出して震えた。あんなものを作りだす日本人。恐るべし。

「すまぬ……。辛い過去を思い出させてしまった」

ソイはしっぱが垂れた姿で謝った。やべー、マジで可愛い。さっきのしっぱフリフリも危なかったけど、今も凄い攻撃力。くそっ息が乱れる。

ソイは私の姿に若干引きながら消えていった。私の意識もゆっくりと堕ちていった。

その頃の神殿

コレトは今、人生で一番後悔をしていた。それは昨夜の自分の見通しの甘さに、そして今朝の自分の迂闊さに。

ソイと私2（前書き）

今回はカインサイドなのでアオイさんはお休みです。

ソイと私2

カインサイド

神官の朝は早い。早朝の方が空気が澄んでいる分、精霊の声を聞きやすい。

私は普段よりも早く目が覚めた。寝起きは悪いわけではなかったが今朝ほどすっきりと目が覚めた事は無かった。アオイが同じ世界にいるという事、それが私を安心させていた。アオイは寝ているのだろう。守りの館から神殿に行くまでには私の自室を通らなければならないがそんな気配はなかった。

昨夜の騒動で疲れているのだろう。私は今まで政治に興味は無かった。もちろん今も全く無いが。あれが権力に踊らされている者たちの姿か。滑稽な道化師どもめ。

側室一家の様子には驚いた。特に第二王子と第一王女の頭の悪さには呆れを通り越して殺意さえ生まれてくる。あの場にはアオイがいたので優しく注意（カインにとっては）出来たが次からは抑えが出来そうにない。

アオイはもう少し寝かせておこうか。今日はもともと余裕をもって予定を組んである。

（数時間後）

私は神官長の仕事を行っていた。昨夜コレトに昨日の分までは終わらせておいたので量はあまり無かった。

「カイン、そろそろアオイ様起こした方がよくないか？あんまり寝すぎると反対にしんどいぜ」

・・・もうそんな時間か。確かにそろそろ起きた方がよいだろう。コレトにしては気がきくな。私はアオイを起こすべく席を立った。

「おいおい、返事しろよ。昨日のお前はどこに行っただよ・・・」

コレトの声がしたが気にしない。私は守りの館に向かった。後ろからコレトがついてきていが無視をした。コレトのために時間を潰したくない。

守りの館についたがアオイが起きた気配は無かった。近くにいたメイドにアオイの所まで案内をさせた。アオイはまだぐっすりと眠っているようだ。私たち（私とコレト）が寝室に入っても起きようとしな。気持ちよさそうに眠るアオイを起こすのは忍びない気がする。

「・・・うん・・・」

アオイが起きようとしているのか寝返りを打った。私はアオイを起こそうと声をかけた。

「アオイ、そろそろやめてー！起きます。二度寝も三度寝もしません。きちんとお布団さんと別れます。彼は悪くないの！！私が勝手に好きになった・・・」

オフトンさん？誰だそれは。アオイの思い人か？アオイに好かれていたにも関わらず別れたのか？なんという無礼な奴だ。もし目の前

に現れたのなら私の神力で魂の一片も残さないように消しさつてくれる。もちろん、楽には殺さない。生まれてきた事を後悔させ、自分から死を願うようになるまで追いつめなければならない。そう考えると笑いが出てしまった。

隣にいたはずのコレトが私から離れようとしたが、そんな事はさせない。コレトの周りに結界をはった。コレトの顔色が悪いが気にしない。

「カイン、おまえは神官長だよなっつ。神に仕えてる神官の長だよなっつ」

「何を当たり前のことを。とうとう可笑しくなったか？コレト」
私は（コレトを結界に入れたまま）アオイの寝室から出て行つた。
アオイはまだ寝ていた方がよい。メイドにもそう伝えた（なぜかメイドは泣いていた）。

「おかしいのはおまえだ、カイン！そんな真つ黒オーラが出まくっている神官などいるかっ。神と正反対の存在になつてゐるぞ！

まず俺を結界から出せ、そして休みをくれ。俺は今から具合が悪いんだ。「却下だ。」

畜生！！お前の笑顔をこんな形で見なくなつた。昨日の俺の素敵な考えの馬鹿！！ここまで付いてきた仕事熱心（カインを見守ろう隊の隊長）の素敵な俺の馬鹿！！」

コレトの言葉を見無視しながら私は神殿に向かった。

ソイと私2（後書き）

コレトは99%怯えて、1%遊んでいます。
カインは自分が黒い事に自覚はないです。

男の友情と私

私はソイと別れてからしばらく寝ていた。

地球でいう10時くらいに起きた。後から知ったんだけど、この時間の感覚は地球と似ている。こっちは国ごとに神力の大時計があり、これを模した時計を各場所に神官たちが設置している。大時計は神殿の最上階にあつてそこに行けるのは守り神と神官長のみ。今は私とカインだけって事になる。ソナウイの力なのか大時計が止まる事は無い。

私が起きだすとメイドさんがやってきた。この子は私付きのメイドでマリィ。少しおとなしいけど仕事の出来る17歳。私が起きると安心したように顔を緩めていた。寝すぎて心配かけさせたのかな・・・。

「アオイ様、おはようございます。お着替えはこちらにあります。申し訳ございませんが私たちメイドは守り神様のお着替えをお手伝いする事は禁止されております、お1人をお願いいたします。昼食の時間がありますので果実を用意いたしました。食堂にございますが、いかがなさいますか？」

昨日、私が食事の世話を断つたので今日はどうするか聞いてくれる所も気が聞いている。ちゃんと私の事を考えてくれてるって分かる。

「おはよう、マリィ。そうね・・・軽く食べるわ。用意も自分でするからマリィも自由にしておいて。これを着ればいいのね。(服を

広げてみる）・・・神官の服ね。ちょっと中華風の服ね。太極拳をする服みたい・・・」

「チュウカ・・・タイキョクケンですか・・・？アオイ様は博識でいらつしやるんですね。私には分からない言葉ばかりです。こちらではこの服はダルンといいまして神に仕える方の方に許された服です。守り神のダルンは金の糸で模様が、神官は銀の糸で模様が描かれております。」

「ふーん。そうなんだ。ありがと、マリー下がっていいよ」

マリーは一礼すると静かに部屋を出て行った。私は取り合えずダルンを着てみた。案外似合ってる。ゆったりズボンは楽だし、ほとんど装飾が無い。これがひらひらレースのドレスだったり、宝石ゴテゴテの装飾なら私は泣いていただろう。日本人の顔に絶対に合わないもの。

私はモモに似た果物（味はりんごぽい）を食べ、神殿に向かった。

昨日知った（当たり前前だけど、一昨日までは地球にいた）けど、私が神殿に行くには神官長の部屋を通らなくてはいけない。反対もしかり。カインによれば1000年前の守り神殺しが原因らしい。詳しくは分からないけど神官が守り神を裏切る事は絶対に無いらしい。神官長室のドアをノックすると凄い勢いでドアが開いた。

「神よー、救世主よー、アオイ様よー、カインを止めて下さい。（アオイの後ろに隠れる）」

あれっ世界ってこんなに明るかったっけ？風はこんなに心地よかつたっけ？」

コレトさんは私の後ろで感動していた。一体何があったのか理解で

きない。カインは昨日と変わらず表情は少なめの顔をこちらに向けている。でも部屋の雰囲気はドヨーンとしている。昨日の腹黒カイン様が降臨したのだろう……。原因は知らないけど。

「カイン？コレトさんはどうしたの？」

一応、聞いてみた。たぶん本人は気付いていないと思うけど。

「分からない。コレトの行動は予測できない」

やっぱり……。コレトさんは涙目で「……。ひどい。俺が悪いのか……。？」って言ってるし。コレトさんは美形だけど厳つい系、しかも超長身。160？の私に隠れて泣く姿ははつきり言ってる気持ち悪い。確かにコレトさんは気の毒だけど私を巻きこまないでほしい。とりあえず、この事は無視をする。

「二人とも、おはようございます。こんな時間まで寝ていてごめんなさい。私は今日は何をしたらいいの？」

「アオイ様、今の状況まるで無視！？なにこれ、イジメ？」

そんな扱いを受けても優しい俺って天使力モさー仕事でもしてきますかね、神官長様 お・れ・の・へ・や・で では、ごっつゅっく
り

あ、アオイ様おはようございます。ご予約はカインに聞いてくださいね」

そう言っただけでコレトさんは別のドアから出て行った。朝から元気な人だ。カインはあっけにとられている。そして苦笑していた。

「全くあいつは……。」

カインもまたコレトさんを信頼しているのだろう。昨日といい今日といい彼に対しては素の表情をしている。そう言ったらお互いに否定するだろうけど。

カインは私の方に向きなおして言った。

「おはよう、アオイ。今日の予定は精霊たちと会う事だ。精霊たちは森の奥にいる。今から会いに行くか？それとも昼に行くか？」

「精霊か……。今から行きたいな」

ソナウイの話だと精霊たちは魔法を使えるらしい。THE 異世界といった感じがする。早く見てみたいし、精霊という存在にも会ってみたい。今はまだ守り神として仕事も何もしていなし、正直異世界にいるという実感はあまり無い。まだ外国に旅行に来ている感じ。少しでもこちらの世界に慣れたかった。カインはすぐに頷いてくれた。

「分かった。では今から行こうか。……アオイ、よくダルンが似合っているな」

くそっ天然のたらしめ……。

男の友情と私（後書き）

カインはコレトのお節介に気が付きました。

精霊と私

私はカインと一緒に森を歩いている。この国の気候は日本の秋くらい。1年を通して殆ど気温は変わらない。ほかの3国ももう少し暑いか、寒いかの違いらしい。守り神の有無で気温の変動はほとんどないが天災が増えるらしい。カインが言うには守り神の有無というよりもこれから会いに行く精霊たちが問題らしい。守り神は精霊たちを無条件に引き付ける者であり、精霊たちは守り神がいない国に対して興味を持たない。そのため土地は痩せ、もろくなる。脆い土地に雨が降るとすぐに流れてしまい、土砂になる。さらに土地が弱い植物は育たない、育ってもすぐに虫にやられてしまう、と悪循環が続くそうだ。

「要するに、精霊たちは守り神が大好き。守り神がいるからその国を栄えさせるけど守り神がいないなら知らないという事ね・・・。自由人ね、精霊は」

この世界の精霊たちがどのような存在なのか分からないが、少なくとも人間には友好的ではないのね。守り神の有無でここまで扱いが違うのかと呆れてしまった。

神官は神に仕える者であり、精霊の声を聞くものらしい。神の声を聞いたものはほとんどいない。守り神の誕生を知られる事以外に神の声を聞いたものはいないそうだ。

神官たちでさえ精霊の声を聞けるものは力のあるものだけ。ソナウイは精霊の力はそんなに強くないと言っていたけど、その辺どうなんだろ・・・。

「精霊って強いのか？ソナウイはあんまり強くないって言っていたけ

ど・・・」

カインに聞いてみた。が、カインは固まってしまった。目は開きまくり。

うーん、美形は驚いても美形なのか……。しかも絵になる。タイトルは“美形の驚き”って所か、そのままだけど。

「アオイは創造主とどんな話をしたのだ……。精霊とはこの世のすべて。強い・弱い存在ではない。そうだな……。例えば水とアオイは戦えるか？」

「戦えない。どう戦うか分からない」

「それと同じだ。水と戦う事は出来ない、なぜなら形が無いからだ。しかし水は存在している。そして水が無ければ生物は滅びる。強い・弱い判断は出来ないが絶対に必要なものだ。

精霊とは肉体が無いもの、しかしそこに存在している。そして、精霊に刃を向けるという事は自身の破滅を現している。

精霊とは1であり、100であり、無限に存在するもの。精霊とはこの世界を握る者、創造主とはこの世界を作りし者。両者は全く同じであって全く異なる存在」

「・・・ならなぜソナウイはあんな風に言っただろう。」

「・・・創造主の考えは私には分からないが……。アオイは神の使いであって精霊とは存在が違うものであって、アオイや創造主に比べると・・・という話ではないのか？」

カインの慰めにとりあえず納得してみる。私が想像している精霊は人型だし、守護してくれそうな感じのものばかり。この世界での精

霊とは違うみたい。

「ありがと、カイン。」

精霊たち（とりあえず複数形）にはまだ会えないの？あと、精霊の使う魔法ってどんなものなの？」

「もうすぐだ。あの大樹の下が守り神の場所だ。魔法か・・・直接見た方が理解しやすいであろう。もうしばし待ってくれ」

あの木の下ね・・・。カインに了解と頷いて見せた。関係無いけどカインって案外体力あるわね・・・。見た目は大きいけどイメージは病室の儚い美青年なのに・・・。

カインの言った木は本当に大きかった。屋久島の縄文杉みたいに太く大きかった。見ているだけで圧倒されそうだった。カインに促され、大木に近寄った。

守り神^{わたし}だけが木の下にいる事が許されるらしい。一步、木の下に入った。

すると一気に光に包まれた。

「ようこそ守り神」、「はじめまして守り神」、「疲れていない？」

、「一緒に遊ぼうよ」、「待っていたのよ」、「お名前は？」

一気に多くの声がした。どの声も全く違っていたけど、同じにも聞こえる。普段聞いている人の声と全く違う。直接、脳に聞こえているような・・・。

これが精霊、精霊たち・・・。全員が火の精霊であり、水の精霊であり、風の精霊・・・もっと多くの精霊なのだろう。

私は、アオイ。アオイと言っ
なるとなく口に出さなかつた。本当に理由などなかつた。精霊たち
にとってそれが当たり前なように私にもそれが当然のように感じた。

精霊と私（後書き）

カインは神官なので木の下には入れません。
横でずっと（アオイを）見てます。

精霊と私2（前書き）

今回はすごくシリアスです。

精霊と私2

アオイ、アオイ、新しい守り神

神の使いアオイ、ソナウイの愛し子

我らの守りし 異世界の娘

精霊は唄いながら私の中に消えた。いや、私の中を通って、後ろの大木の中に消えた。

精霊が通った所（胸）はなんだかポカポカした。見た目は何も変わっていなかったし、もちろんそこに精霊がいるわけではない。でも、何かに守られているような感じがする……。

「精霊たちに受け入れられたようだな……。アオイ、神殿に戻るぞ」

カインが私を呼んだ。でも返事なんて出来なかった。

精霊に受け入れられる……。これが受け入れられるということか……。

初めから友好的だったし、ソナウイも守り神は無条件に精霊に好かれると言っていた。私のイメージでは“精霊の加護”みたいなものをつけて精霊の力が自由に使えるといったものだったんだけど……ちよつと違うみたいね。ううん、もっと怖い事なのかもしれない。

肉体のない精霊、でも確かにそこに存在していた。彼らは世界を握るものたち、そして私を守ってくれる……。彼らに刃を向ける事

は自身の破滅を現す事。

なら、私に刃を向ける事は？

彼らが守り神を愛し守ってくれるならば、私の敵は彼らの敵……。この世界の人たちのすべてが守り神に友好的な訳が無い。もし、そんな人たちが私を攻撃してきたら？殺すつもりなんて全く無くても、守り神を傷つけた人間を精霊たちはどうするのだろう。

カインの話からすると精霊たちは人間に興味が無い。人間が生きようが死のうが関係無い。

おそらく私を守るために躊躇なく消してしまうのだろう。まるでそれが当たり前のように。
私が守り神という存在である限り、私は常に周りの人間を殺す存在であり続ける。

ソナウイは初めに言った。守り神は人形では無いと。自分の思うように生きればいいと。

あの時は何も思わなかった。何も感じなかった。その言葉がどんなに深い意味があるのか気付けなかった。

なんて浅はかな自分。人形の方がはるかに楽なのに……。自分の意思が通るという事は自分のすべてを決めなくてはいけないという事。……人間の生死さえも決めるという事。

大きな自由の裏には同じだけの責任があるのに。

「ア・・・イ・・・アオ・・・アオイ!」

カインの声がした。顔を上げると目の前にカインがいた。私は気が付かないうちに樹の下から出てきていた。

「一体どうした? 顔色が悪いぞ・・・疲れたのか? 少し休もうか?」

疲れた?・・・疲れてはいない。ただ自分の存在の危険さに寒気がしただけ・・・。

私は首を左右に振った。

「そうか・・・?」

「そんな事よりカインに・・・神官長に聞きたい事があります。精霊たちは守り神を守ると聞いた、守るということはどういう事なのですか?」

・・・守り神を傷つけた人間は今までどうなったのですか?

精霊は人間に興味は無いのでしょうか・・・?

私を傷つけた人はどうなるの!?

・・・殺してしまうの?」

カインは、はっとした顔をした。そして下をむいてしまった。その反応をみて私は自分の考えがあっている事を理解した。自分が守り神であるとともに、死神である事を・・・。

精霊と私3（前書き）

今回はカインがよくしゃべってます。

精霊と私3

私は震えが止まらなかった。

自分が人の死ぬ原因になる事が怖くてたまらなかった。自分の周りで人が死ぬ事なんて無かった。殺人事件や事故、戦争・・・すべてテレビで聞いていた事がある。でも全部他人事だった。あつちの世界での私にとって人の死はとても遠いものだったのに、今の私の周りには死しかないのかもしれない・・・。

気が付いたら私はカインに抱きしめられていた。私の視界にはカインのダルンしかない。結構な力で抱きしめられているから身動きが取れない。

「アオイ、あなたは守り神です。あなたの誕生をこの国の人間は待ち望んでいた。

言ったでしょう？この国は10年前に先代守り神が崩御された瞬間から、少しずつ精霊たちは離れていった、それは多くの者が死んでいったという事。

あなたは自分のせいで人が死ぬと恐れている。自分が人を殺すと・・・。

でもあなたが守り神になった事で救われている命が多くある事を忘れている。今、この瞬間に生まれている命がある。」

涙が出てきた。自分がいることで、守り神になった事で救われた命がある。それが本当かどうかは分からないけどこの国の人に、カインに言われたことで自分がこちらに来た意味があると言われている

ようであつた。

「確かに精霊が守り神を害した者を殺す事はある。しかしそれは稀だ。

理由は2つある。1つはこの国に守り神を害しようとする人間が殆どいない。恥すべき話だが利用をしようとする輩はいるがな……。もうひとつは我々の存在だ。神官は神に仕え、精霊の声を聞くものだと言つたな？この二つには愛する者がいる。それは守り神だ。我々神官は邪な人間から守り神を守る。精霊たちが動くよりも早く、確実に。小さい芽のうちに対処する。

我々は神の名のもとに人を罰する。平民の罪も、貴族の罪も、王族の罪もすべて神官が決める。死が罪に相当するかどうかは神官長、つまり私が決める。1人が死ぬ事で救われる命があるから、私はこれまで死刑を判断できてきたつもりだ。

アオイは賢い、そして優しい。精霊に受け入れられる段階でそこまです理解出来る者は少ない。力に溺れる者がほとんどの中で、力の意味を理解し怯えるなんて……。

忘れるな。おまえの心が傷つかないように我々はいるのだ。

創造主、ソナウイの名に誓おう、私は神官長として……。いやカインとしてアオイを人間からも精霊からも守ると」

私は本当に幸せものだ。

ソナウイにチャンスをもたらした事、この国で愛されて生きていける事、そしてここまで私を思ってくれる人に出会えた事。

カインに何か言いたかったのに、嬉しかった事や安心した事、ちょっと恥ずかしかったことが頭の中でぐちゃぐちゃになってしまつて言葉が出なかった。ただカインの腕の中で頷く事が精一杯だった。

しばらくして、泣きやんだ私はカインと一緒に神殿に帰った。

いっぱい泣いたせいで顔は真っ赤だったけど、精霊たちが気を使ってくれたのか水の塊が私の頬当たりにずっと張り付いていた。体温で温くなる事も無くほてりが収まるまですっと。優しいなっと感じた。

精霊を怖がってばかりいた自分が恥ずかしくなって、心の中で謝った。そしたらすぐに風が一瞬私の周りで踊った。まるで慰めてくれるように……。

カインは何も言わなかった。これからの事も精霊の事も。

やっぱり凄く優しい人なんだな。

……まあ天然のたらし君だけど。さっきソナウイに誓ってたけど、アレは一種のプロポーズだぞ。素って恐ろしい……。カインは顔よし性格よしなんだからあんな事言っただけの人が勘違いしてしまつたら可愛そうだな……。

神殿でコレトさんと出会った。

コレトさんはカインを無理やり近くの部屋に引きずり込んだ。しばらくしたらカインが真っ赤な顔で出てきた（コレトさんは床で伸びていた）。

ちなみに二人の会話

コレト「お前、さいあく。俺ちよつとカインがこわい。そんな
に手が早かったなんて・・・」

カイン「何のことだ」

コレト「とぼけちゃって。アオイ様泣いてたでしょ、目が真っ赤。

しかもお前のむねで ダルンが濡れてるぞ」

カイン「なっ・・・。だからどうした」

コレト「んまー開き直っちゃって あの方は簡単に涙を見せる方ではない。そんなアオイ様が泣くということはお前に心を許しているという事だろ。それを堂々と隠す事もなく見せるなんて・・・。」
俺はアオイ様の特別だ」って宣伝しているようだぜ。まあ、アオイ様は知らんがお前にとつたら好都合かもグエツ」

カイン「う、うるさい／＼／＼／＼」

カイン出ていく。コレト、カインの拳がみぞうち直撃。悶えてマス。

精霊と私3（後書き）

よくわかりにくい文章ですみません（*—*）

贈り物と私（前書き）

今回は本編とあんまり関係ありません。気楽にお読みください

贈り物と私

こんにちは。稲葉碧あらため守り神アオイです。
現在、私は異世界にて守り神という仕事をしています。創造して
たよりも精神的に辛いものがありますが何とかやっています。手は
腱鞘炎ですが・・・

この世界に来て1ヶ月が経った。王族の人たちとはあんまり会えな
いけど、神殿の人たちとは一応仲良くやっています。

新守り神の初めの儀式もろもろの行事はひと段落して今はのんびり
と暮しています。

のんびりといっても仕事は多く、各地からの要望書（精霊被害関係
のものが多く、農作物が育たないから税まけるなど）の処理が追い
ついていない状況ですが・・・。

初めは人を殺すかもしれないという恐怖に震えていた私。この世界
にきて初めて泣いた。

そんな私を慰めてくれたカイン……。あの時は優しかった。ちょ
っとときめくくらいに優しくかった。あの時は！！

現在私の前には山のような書類が……。比喻表現ではない山の書
類。先代守り神が亡くなって10年。溜まりに溜まった書類たち、
始めのほうのものは変色してるくらいに古いもの……。この書類
は守り神にしか処理できないらしい……。つまり手伝って（むし
る代わって）くれる人はいないという事。

カインを初めコレトさんたちは私がこちらの文字が読めないものだ
と手加減する予定だった。サインも書けないと思っていた。そう思
っていた！！（大事な事なので2回言いました）

ソナウイにこの世界の文字が読めるのか聞いた時反応・・・

“もちろんじゃ。文字は地球とは違うが読める。ただ書くのは出来ん。自分の名前くらいは書けるようにしておこうかの。自分の名前くらいは書けるようにしておこうかの。自分の名前くらいは書けるようにしておこうかの・・・”

そういう事が、ソナウイ！！この状況が分かっていたのだ、絶対に！！

あのドS、この国にSが多いのもソナウイが創った世界だからだ。

「アオイは文字が読めるのか・・・自分の名前も（ニヤ）」

あの時のカインの顔は忘れられない。カインVS貞子・ジェイソンの素敵コンビをシーソー（恐ろしい方に傾くとしたら）にのせたら絶対に一瞬で貞子とジェイソンは空に飛ぶだろう（カインの方に勢いよくシーソーが落ちた時のあまりの衝撃で）。

やっぱりカインもこの国に人間で、やっぱりドSで・・・。コレトさんは絶対Mだと思っていたけど隠れSで・・・。

今は軽く拷問を受けています。ちなみにここはカインとコレトさんの執務室・・・めっちゃ広いから私の机が増えても大丈夫みたい。いや広すぎだろ、音楽室くらいあるぞ。

初めは私の部屋（守りの館にある。寝室の隣）でやっていただけだ・・・。

うん、まあ、ねえ？ほら私って大学生だったじゃん？ずっと椅子に座る事ってさああんまりないじゃん？テスト前くらいしかないじゃん・・・それも2・3日・・・。

はい、初めて3日で脱走しました。しかもドアの外には警備の人がいるから窓（2階）から逃亡しました。シュツタと着地。目の前にカイン。

はい、見分かりました。魔王に見分かりました。

鬼だなんて・・・もつと怖かった。鬼がぺ。ちゃんに見えるくらいに恐かった。

昭和の歌の中で「ただ貴方の優しさがこわかった」とあるけど、まさにその通り！！

優しいカインは超絶に恐い、目が笑っていないカインは魔王様・・・。学習しました。その時は。

これを繰り返す事3回。

私の机と椅子はカインとコレトさんの執務室に移動しました。しかも入口近くはコレトさん、窓の前は魔・・・カインがいます。

私はここ2週間ほど真面目に仕事をするしかなかった。ちなみに要望書の多くは貴族からのもので明らかに詐欺っぽい匂いのある減税願いや、国庫負担金の増額希望・・・。本当に困っている人からのものは100枚に1枚あるかどうかのレベル。

1日に5、6件要望書が届く。もちろん毎日。これが10年分・・・。逃げたくなるでしょう？

哀しい私の状況は置いといて、素晴らしい出来事がありました。

ソナウイの贈り物！！私は動物（生物？）の言っている事が分かるようになりました。前に言ったように私は動物が大好き。彼らの言葉は知能が高いほど聞こえるので虫の声は聞こえない。ミジンコの願いとか聞こえても困るし・・・よかった。

きっかけは脱走

魔王さまに見つからないように周りを注意しながら逃走用の窓に足をかけた。その時鳥に笑われた。いわくカインがこちらに向かって

いると、今日もやっぱりばれるのだと笑われた。

私はびつくり&感動してバランスを崩した。前方・・・つまり窓の外に向かって。

一瞬、死ぬッと思ったけど下に来ていたカインに助けてもらってなんとか事なきを得た。身体的にはね。精神的には2回は閻魔様と挨拶を交わした。

と、とにかく私はそれ以来いろんな動物と話しをしている。動物たちは個性があつておもしろい。メイド以上に井戸端会議をしているしいろんな情報を知っている（誰その趣味は・・・のレベルから国家機密まで）。

小鳥に廊下ですれ違った人がカツラだと言われた時はつい噴き出してしまった。ブハッと豪快に。乙女にあるまじき行為だわ。最高だったけど。

ソナウイ、グッジョブ 凄い能力をありがとう。

贈り物と私（後書き）

カインさんは窓からの脱走を特に怒って魔王化しています。
脱走程度なら鬼化する程度です。

ちよつと番外編を続けようと思うのですが、リクエストがあれば教えて下さいネ。

観察日記と私（前書き）

リクエスト作品その？です。

今までで一番文章がひどいと思いますが・・・ごめんなさい。

観察日記と私

初めまして。私、アオイ様付きのメイドのマリーでございます。アオイ様のお世話を行うのは中級神官です。私も8の時から現在までの9年間神殿で生活しております。

私はあまり社交的な性格ではございませんのでアオイ様のお世話は出来ないと思っております。神官の大部分がそうなのですが、私は特にその傾向が強かったです。

しかし、アオイ様はそんな私を嫌がりもせず話かけてくださいます。

「マリーはマリーなんだから、ほかのだからと比べなくてもいいのに。」

社交的がいいとは限らないし、少なくとも私はもの静かなマリーが好きよ」

今まで、親にでさえ私の性格が暗いと言われてきました。それをもっと高貴なお人であるアオイ様が否定してくださるなんて……。私、決めました。一生をアオイ様に尽くそうと！もし悪い虫が付くならば、相手が王族だろうが、精霊だろうが、神だろうが許しません。絶対に阻止してみせます。

ちょっと話が脱線してしまいましたね。言い忘れておりましたが私、コレト様が作られたカイン（様）を見守ろう隊改め、アオイ様とカイン様を見守ろう隊のメンバーですの。

初めはこの見守ろう隊がちょっと嫌で、裏で抹殺しようとしたのですが、アオイ様がカイン様の胸でお泣きになった事を聞きすぐに

入隊しました。そして私はコレト様から特別任務（アオイ様とカイン様の観察日記）を課されました。以下に報告書がありますので、ぜひお読みになって下さい。そして、ぜひアオイ様とカイン様を見守ろう隊に入隊して下さいませ！！

アオイ様とカイン様の観察日記

メンバー番号 11：マリィ

○日

お昼前、王夫妻が神に感謝をするために神殿に来られる。神官長はその場で神に取り次ぎをするのが通例であるがカイン様は（誰でもできる）仕事を理由に拒否。挨拶のみで自室にこもる。

昼食後、アオイ様がカイン様を散歩に誘われる。カイン様は迷わず（神官長の判がいるもの）仕事を放棄して森に出かけて行かれた。代わりにコレト様が呼び出される。

×日

アオイ様が窓から脱走された。カイン様の目の前に降り立ったため程なく保護（拉致）。なぜカイン様がその場所におられたのかは調査中。

アオイ様はその後真面目にお仕事されていた。

日

今日は神殿に激震が走った。コレト様は笑いすぎて顎が外れ、私は

目の錯覚かと思い眼を擦りすぎた。おそらく神官は今日という日を忘れない。カイン様がアオイ様に「アーン」をした今日を。

追加報告

詳細報告の希望が多かったため以下に報告する。

アオイ様は夕食で出たペンサー（洋ナシに似た辛い食べ物）が口に合わなかった。目に涙を溜めながら「辛い」と言われた。しかし、その場にあつたものは温かいお茶とペンサーのみ。辛さを弱めるものは無かった。一緒に食事を取っていらしたカイン様がポケットからミル（飴のような砂糖で固めたもの）を取りだされた。疑問？なぜ持っているのか

・ 「アオイ、こちらへ」とアオイ様を呼び、顎に手をかけ、そして・

「口を開け」 疑問？ここでミルをアオイ様に渡せば問題無かったアオイ様が口を開いた瞬間にミルを「アーン」とした。

アオイ様は真っ赤になったがカイン様は気にする様子はない。もちろん周りは大爆笑１人、啞然大多数↓その後目をそらす、といった微妙な空気になった。

□日

アオイ様、３回目の脱走が失敗。今回は窓から落下された。カイン様が偶然通りかかっており、アオイ様を受け止められたためお怪我はなかった。

その後、強制的にアオイ様の仕事はカイン様の執務室に移動になった。

コレト様がなぜアオイ様の脱走がわかるのかカイン様に聞いたところカイン様は以下のように答えられる。

カイン様情報（コレト様はアオイ様の脱走の度に聞かれている）

- ・アオイの周りから不穏な空気が流れる（1回目）
- ・精霊たちがアオイの脱走を面白がる空気が流れる（2回目）
- ・なんとなく・・・（3回目）

コレト様談

- ・アオイ様とカインはどれほど離れていたと思ってるんだ。10トプ（約100メートル）は離れていたし、まず神殿の中でどうやって不穏な空気をを感じる？おかしくね？
- ・神官の中でカインの次に能力が高いのは俺だ。その俺ですら精霊たちの変化に全く気付けなかった。そもそも面白がる空気ってなんだよ！
- ・なんとなくなつて恐えよ。どんだけ勘がいいんだよ。てか、神官レベル高つ！！
- ・アオイ様苦労するな・・・

以上で今回の報告を終わります。

第1王子と私（前書き）

過去編に突入です。

暗い話&残酷描写がありますので気をつけてください。

第1王子と私

「今夜は本当にすつきりしたわ……。今まで神官長は面白みが無いと思っていたけど最高ね。ホントに素直というか正直というか・・・いや、アレは本能のままに生きるといことね。全身からアオイ様大好きオーラが出てたわ。」

セシアは後宮にある王の間で寛いでいた。半刻ほど前に守り神の祝賀会は終了しており、王夫妻と王太子は先ほどこちらに戻ってきていた。王はその後、宰相に呼ばれ執務室に行っている。

スタルは笑いすぎによる窒息死を半分経験してしまい顔色はあまり良くなかったが（顔色の悪さは二つ名をもらった事への不安も大きい）、セシアの言葉に頷いた。

セシアがシャローにあのような言動を浴びせられる事は少なくない。むしろ事ある事に難癖をつけてくる。それはスタルにも同じ事であった。特に王太子になってからは頻度と共に内容もエスカレートしてきている。そして難癖の殆どが身分による蔑みである。

セシアの身分が低い訳ではない。セシアはアーガイル家出身で、このシュヴァにおいて賢人を多く輩出している名門である。しかし、欲の少ない者が多い事が特徴で子に自らの地位を世襲させる事はほとんどない。また、王族に娘を嫁がす事もあまり行っていない。このため名門ながら身分がさほど高くない。反面、王族や民衆からの信頼は厚く政治の中核を担ってもいるため影響力は絶大である。

セシアが王に嫁いだ事も政治的な意味はほとんどない。元々、王のググロと兄のキロイが幼馴染で親友であった事が馴れ初めである。たまたま兄と王宮に来ていた当時11歳のセシアに13歳の王太子

ググロが一目惚れし、その場でプロポーズした（その後、キロイに殴られる）。しかし、このころ彼はすでに名門ガイザー家のシャロ―と婚約が決まっていた。ガイザー家は王族との婚姻や子に地位を世襲させる事で権力を掌握しており、身分は王族に次ぐものであった。さらに当時の王妃がガイザー家当主の姉であつたためこの婚約に反対出来るものはいなかった。

はじめセシアはググロのプロポーズを断っていた。いや、断り続けていたと言った方が正しい。セシアが結婚を了承するまでの約7年間会ったたびにプロポーズを受け、そのたびに断っていた。この7年の間にググロはシャロ―ほか4人の女性と結婚していた。結婚といつても形だけのもので恋愛感情は一切無かつたのだが・・・。

国民中がこの二人の事を知っており、セシアが結婚を了承するか賭けが行われるほどであつた。セシア自身もググロの事は尊敬しており、また淡い恋心を抱いてはいたのだがガイザー家からのいやがらせ（贈り物と称して動物や虫の死骸などを送つてこられる事もあつた）に対応する事で忙しかつた。セシアは元々、「やられたらやり返せ」とキロイから教えられていた。いやがらせには相応のものを返していた。また、キロイが面白がつていろいろと知恵を貸しては暇を潰していた。また、セシアは政治について興味を持っていた。ググロとの結婚よりも自身の勉学を行いたかつた事も大きい。

結局は王のものの凄い熱意に折れる形でセシアは妃とり、同時にググロが王に即位した。この当時は、王妃は空位であり第一妃がシャロ―となつていた。

そして翌年にはセシアの懐妊の知らせが国中に広まつた。国民は二人の成り行きを見守つていたため大いに喜んだ。また多くの貴族は王のセシアへの寵愛やアーガイル家の欲の無さを知つていたため素

直に世継ぎの誕生を祝福した。

その後、セシアは王子を出産した。名はレニユー・アラウイ・シュヴァ。

王太子スタルの兄であり、王ググロの第一子である。

第1王子と私2（前書き）

過去編第2弾です。

今回はすんごい暗いです。注意してください。

第1王子と私2

王子、レニユー・アラウイ・シュヴァ。

今はその名を知るものはほとんどいない。なぜなら生まれてわずか1週間でこの世を去ったからである。

国民や多くの貴族には死産であつたと伝えられた。名前さえ伝わっていない。

セシアは子供の誕生を心待ちにしていた。生まれてくる子供の性別などどちらでもよかった。元気に生まれてくれればと、毎日そればかり祈っていた。ググロもセシアの傍らで、同じように祈っていた。王位継承権など二人の考えの中には無かった。もちろん、セシアの中には“王妃”という言葉さえ浮かんでこなかった。

「忌々しい、セシアめ……。あの様な女がいるために王は私の元に来られない。

しかも懐妊だと……。もし王子が生まれたのならあの女が王妃になつてしまう……。なぜ私ではない？私のほうがすべて勝っているのに……

卑しい身分のあの女がこの国の王妃？認めない、絶対に認めない！私のものを盗むセシア……。愚かで身の程知らずの女……。今に見

ておれ」

第一妃のシャローは“王妃”に執着していた。

生まれた時から、当主である父に王妃になるための教育を受けてきた。また、自身の容姿が優れている事を知っていた。元々の性質か、育ち方かプライドの高い傲慢な娘に成長した。その証拠にシャローは心からの謝罪や感謝をした事が無かった。自分はしてもらって当たり前、謝罪も自身よりも身分の高い者にたいして形だけの謝罪を行ってきただけだった。またシャローは何事も一番ではないと気が済まなかった。いや、自分以外が一番になる事すら考えられなかった。

王太子との婚姻も、第1妃という地位もシャローにとっては当たり前的事だった。いずれ自分がこの国の王妃になるのだと、信じて疑わなかった。

そんな時セシアが現れた。王が本当に愛しているのはセシア、婚姻を望んでいるのもセシア。貴族がそのように噂しているのを聞いたびに叫びたくなった。

何度も父に訴えた。セシアと王太子の婚姻を止めてほしいと、伯母である王妃にも……。しかし返答はどちらもNOであった。セシアがググロに惹かれて以上、反対出来る理由が無かった。もちろんセシアのためではなく、アーガイル家に喧嘩を売る事が出来なかったからだが……。アーガイル家は味方では無いが敵でもない。もし、セシアの婚姻に反対をすれば敵に回すことになる。身分ではガイザー家の方が上だが、王や政治への影響力は比べ物にならない。もし、セシアが王妃になってもアーガイル家が敵に回る事を考えれば損害は小さくてすむ。一族はすでに繁栄しており、シャロー1人が王妃になれなかったとしてもさほど大きな事ではなかった。父としては娘の願いは叶えてやりたかったが、ガイザー家当主としての

判断をした。反対に伯母である王妃は自分の息子の幸せを優先しただけであつたが・・・。

セシアへの嫌がらせはシャロー個人のものであつた。父は許しはしなかつたが止めもしなかつた。シャロー自身、この憎しみをどのようにすればいいのか分からなかつた。

セシアと王太子の婚姻、そしてググロが王に即位した。

シャロー以外の妃はすでに王の寵愛をあきらめていた。そして実家に帰ってしまった。

そしてセシアの懐妊・・・。シャローが一番恐れていた事が起きた。

もし、王子が産まれたら・・・。

いいや・・・無かつた事にすればいいのだ・・・。

セシアの子供が男子の訳がない。そうよ、私が第一王子の母なんだから。セシアの訳が無いじゃない。

ねえセシア、あなたは姫を生みなさい。そうすれば何もかも上手くいくの。

あなただつて可愛いわが子を失いたくないでしょ？

私は忠告したわよ・・・

そして子が生まれた。玉のように可愛い王子が……。ググロとセシアはわが子の誕生を心から喜んだ。乳母も断り自分たちで立派に育てようと決めていた。この時、セシアは人生の中で一番幸せだった。

1週間後、レニユーは死んだ。

今朝までは元気に泣き、乳を飲んでいた。

たまたま、近くに落ちていた指輪を飲み込んだ事による窒息死であった。指輪などセシアはしない。なぜ、そんな所に落ちていたのか分からない。

侍女やセシアが離れた短時間のうちに生後1週間の赤ん坊が指輪を持ち口に含んだ。そして寝返りなどできぬはずのレニユーは仰向けからうつ伏せに変わっていた。

そして、生後1週間で召された赤ん坊は無かったものとして国民に伝えられた。

第一王子が生まれて1週間で事故死するなど不吉だつという意見が出たからだ。

この事故死を不審に思う者がいれば一族の破滅を導くと、危惧したものがいたからだった。まさか、前王妃の一族のものが王の第一子を殺したなど、あつてはいけない話なのだから……。

ねえセシア、ダメじゃない。忠告はしたのに・・・
だから、無かった事になったのよ。あなたの大切な子は・・・

第1王子と私2（後書き）

不愉快に感じられた方はすみません。

赤ちゃんの窒息死は本当に多いのです。助かっても脳に大きな障害が残る事があります。

第1王子と私3（前書き）

過去編第3弾です。

うーん、文章がおいしい処が多々あります。ごめんなさい。

第1王子と私3

セシアは自分の不甲斐なさを後悔し、塞ぎ込む日が多かった。誰がレニユーを殺したなんて考えなくても分かっていた。来る日も来る日も泣いて過ごした。

レニユーが亡くなってから半年が過ぎていた。

どうして自分は王子を1人にしたのか・・・婚姻後もあれほど嫌がらせをしてきたシャローが何もしない訳がないのに・・・。

兄のキロイでさえセシアの泣いている姿は見たことが無かった。そんなセシアがずっと泣いている。声を荒げるのではなく静かに、涙が留めなく流れている。

「なぜ私ではないの？代わりに私を殺せばいい・・・どうしてレニユー・・・ググロの子供に手をかけるの？あなたはググロの妃ではないの？」

ググロはセシアにどう声をかけたらいいのかわからなかった。彼も分かつてはいたのだ。シャローが王妃という地位に固執している事、そして手段を選ばない事を。しかしまさか王の子を殺すとは・・・。ググロはセシアを愛していた。8年前に初めてセシアをみた時からずっと彼女だけを愛してきた。笑顔の似合うセシアをもっと笑わせたかった、幸せにしたかった。泣かせたくなかったのに・・・。ググロは思った。

自分が我儘を通してセシアと結婚した。セシア以外の女には正直興味が無かった。部屋を訪れる事どころか贈り物も部下に任せ、彼女たちがいようがいまいがどうでもよかった。シャロー以外の妃がセシアとの婚姻の際に実家に戻った時は、嬉しさよりも彼女らが後宮

にいた事に驚いた。それほど彼にとって関心の無いものだったのだ。シャローが王の気を引こうと手紙を送ってきても読まずに捨てていた。いや、捨てるのはググロの側近で、彼は渡された手紙を適当に置いておくのだ。そして埃が被った手紙を側近が始末する。

ググロはシャローがセシアに嫌がらせをしているのも知らなかった。知っていたら容赦なく後宮から叩き出していた。

ググロは自分の考えの甘さに辟易した。なぜ、シャローを野放しにしていたのか。もしかしたら王子だけではなくセシアが殺されてしまいかもしれない。そう考えると背筋が凍った。今回はガイザー家に証拠を消されてしまった。レニューという王子の存在を。もし、同じような事があれば絶対に許しはしない。ググロは心に誓った。

セシアは夜の散歩に出ていた。侍女と一緒に行くとしたが断った。1人になりたいと言うと侍女は何も言わなかった。

泣きすぎて頭はボーとしていた。前方から人が来ている事に気が付かなかった。

セシアが我に返ったのは、自分が地面に座り込んでからだった。驚いて顔をあげるとそこにはシャローがいた。

「こんばんは、セシア。私の前に立たないで下さる？身分が違うの

だから道をあけるのは当たり前でしょ。あなたが道を開けないからぶつかってしまったじゃないの。卑しい身分だけではなく頭も悪いよね。

あら、顔が赤いわ。唯一の取り柄である顔まで無くなってしまいうわよ？」

シャローは厭らしく笑うとセシアをみた。

セシアは今の状況を理解した。自分がなぜ地面に座り込んでいるのか、そしてタイミングよく現れたシャローの目的を。ここで侍女を呼ぶ事が最善だと理解していた。しかし、感情が付いてこなかった。「私の子供・・・王子が殺されたのですもの、泣くとは当然です。犯人が検討はついておりますが」

「あら、不思議な事を仰る。あなたは死産だったのでしょうか？殺されたただの犯人だの恐ろしい事を・・・まあ、あなたの幻想に付き合っただけあげるわ。

王の寵愛を受けているからといって調子に乗らないことね。この国の王妃に相応しいのは私なの。あなたではない。勘違いをなさるから、命が消えるの。

まあ卑しい血が王家に残らなくてよかったわ。死んで当然だったのよ、卑しい御子は。」

シャローはそのまま去っていった。

セシアは怒りに震えていた。あの女は王子を殺した事を当然だと言った。後悔や罪の意識など微塵を感じていなかった。

「私は泣いているばかりだったのにね、レニユー。あなたを殺した人は何にも感じていなかったわ。私やググロはあなたの分も生きないといけないのにね。馬鹿な母でごめんね。

でもね、シャロー。あなたは絶対に許さないわ。あなたがググロを愛して、そして子を望むなら王妃はあなただったかもしれない。でも、あなたは地位がほしいだけ。

王妃の地位など興味は無いけれど、自分しか愛せない人のためにレニューが死んだというならば、私は愛する人のために王妃になるわ。絶対にレニューが無かった者のようにはさせない。それが私の復讐よ。」

セシアはレニューに誓った。必ず、レニューの存在を消したりしないと。何年かかっても絶対にレニューという王子がいた事を証明すると。

1年後、セシアはスタンを出産する。

そしてとうとう王妃になった。ググロから王妃の証である精霊の涙で作ったペンダントとピアスが贈られた。

スタンはレニューの二の舞にしないように厳重に警備された中ですくすくと育った。兄がいた事、自分が狙われている存在という事を隠さずに育てた。危機感のない人間を守る事は出来ない。幼いころからオリーブに剣を、キロイから政治を習わせた。

スタンは少々天然な所はあるが、まっすぐに育っていった。

不思議な事が起こった。セシアがスタンを出産後、すぐにシャローの懐妊が分かった。王に近い人々は首をひねった。あのググロがセシア以外の女に反応するのかと。

失礼な言い方ではあるがググロ自身が公言している。セシア以外の

女と寝る気はないと。

ググロ自身はセシアにボコボコに殴られ蔑まれた後だったですぐには確認ができなかった。しかし、ググロ曰く「手を出した覚えはない。だってセシアがいるもん」だった。

生まれた子は王とよく似た緑の目をした男の子だった。

さらに2年後、またシャローが懐妊した。

今回はセシア＋スタンから白い眼でググロは見られた。やっぱり「セシア以外を抱くはずないじゃん　ちよっつ殴らないで・・・ぎゃー」

やっぱり身に覚えは無かったが生まれた子の目はやっぱり緑だった。

その当時の守り神は男性だった。

もともとはシュヴァの平民であつたが神に見出され守り神となった。あまり身体が丈夫ではなかったが優しい青年であつた。王族とはほとんど付き合わず、守りの館にいる事が多かった。彼は大きな秘密を持っていた。だれも知らない秘密を。

しかし、時折精霊にだけは話していた。

「紫の瞳の凄くきれいな人と仲良くなれた。彼女はいつも悲しんでいて、慰めてほしいと懇願される。僕の緑の眼が羨ましいと言われ

るのだよ」

時折、精霊たちは唄ってる。

彼と彼女と精霊以外、誰も知らない。

先代守り神は亡くなった。

守り神の言った事を精霊が神官に言うはずもなく、今知ってるのは紫の目の彼女だけ。

今はね・・・。

ねえ知ってる？王家の秘密。

精霊は人間とは話せないけど動物とは話せるの。心が澄んでるから。精霊も動物もおしゃべりなのよ。いろんな事を知ってるの。

知らないのは人だけ。

でもアオイは知ってるの。

動物がメイド以上に井戸端会議をしているいろいろな情報を知って

いる（誰その趣味は・・・のレベルから国家機密まで）事を。

ねえ、アオイ。王家の秘密知ってる？あなたが望むならなんでも教えるよ

第1王子と私3（後書き）

心理の描写って難しいですね・・・

第1王子と私4（前書き）

お遊びが入りました！

第1王子と私4

「……母さん！起きてる？急に黙るからびっくりしたよ……。疲れたのならもう寝たらいいのに。父さんには私から言っておくよ。母さんもう歳な「お黙りなさい。奇跡の王太子。起きてるわよ。」……はい」

セシアは昔を思い出していた。そして今後の事も考えていた。

スタンは少々馬鹿だが立派に王太子となった。今は王の手伝いをする事も多くなり、以外にも政治に向いている事が分かった。

シャローがこのまま黙っているとは思えないが、バローズは王の器ではない。スタンが王になればやっと念願だった、レニユーの存在を言える。戴冠式の王妃のスピーチが私の最後の仕事。

今回の守り神はソナウイの寵愛が深く、この国を繁栄に導いて下さるだろう……

スタンは王太子の証である精霊の涙のピアスを外しながら言った。

「そういえば、アオイ様の服見た？ピアスと髪飾りとネックレスに精霊の涙がついてた。4つもつけてる人初めてみた」。王でさえ3つだけ？どんだけ力強いんだ」

「……スタンはモテない男の典型的タイプね。誰に似たのかしら。絶対ググロね。」

女性に対してそんな風に感想を述べるなんて……。さすがは奇跡の室息王子。

しかも精霊の涙に注目するなんて……。兄様に言っただけで鍛えなおして

もらわないと。

室息王子に優しい母が教えてあげますね。アオイ様の服装で一番注目すべきなのは“風の趾”と呼ばれるシヨールよ。あれは創造主ソナウイの羽から作られたもの。どんな攻撃にも守り神を守るもの。アオイ様はなんとなしに着られていたけどあれ一つを得るためには100年分の全国家予算が必要よ。

室息王子君は理解できたかな？」

「室息王子じゃない！

アオイ様、やっぱりすげー。あの外見で二十歳ってだけでも驚きなのに・・・」

「おいおい、室息王子。女性に年齢を聞くのは失礼だぞ。学習をしないか。

だだいま、セシア。」

ググロが帰ってきた。すでに正装から着替えていた。

「あら、もう仕事は終わったの？早かったわね。」

「父さんまで・・・。一体いつから話を聞いていたんだよ」

「キロイに任せてきた。あいつは笑いすぎて眠れんらしい。

アオイ様の服装あたりから聞いていた。私は女性に対してあんな感想はもたんど。それに風の趾も知っていたしな。」

両親から散々に言われてスタンはちよつと落ち込んだ。いつもの事であるが・・・。

「そつえば、神官長は凄いな・・・。あいつがあんなに熱い奴だ

とは知らなかったぞ。いや、青春だなアレは。アオイ様大好きオーラが凄かった。」

「私もそう思ったのよ。神官長って今まで何を言われても反応を返す事無かったじゃない？一時期なんて、神官長の表情を変えさせよう大会があったのよ。結局、無理だったけど・・・」

「おいスタン。お前に忠告しておく。絶対にアオイ様に惚れるなよ。私は「私もよ」・・・私たちはカインを応援する。なぜならその方が面白そうだからだ。アオイ様にはカインの方があっている気がするしな。」

お前は、なんというか・・・うん。難しいがアオイ様と違うと思うんだ。姉と弟的な感じというか・・・。飼い主とペットというか・・・。

とりあえず惚れるなよ！ちなみにキロイもオリーブもそう言っていた」

「そうよ、あのタイプは敵に回すと厄介よ。もし、万いや億いや兆の・・・無量大数が一、アオイ様と好きあっても神官長を敵に回すわよ。おっそろしいわよ。男の嫉妬は。ね、ググロ」

「・・・ソウデスネ、セシアサン。ソノセツハドウモ・・・」

王太子スタンとアオイは本人たちの意思は関係なしで交際が禁止された。

第1王子と私4（後書き）

セシアとググロは基本仲良しです。
スタンはおもちやです。

おしゃれと私（前書き）

新章突入です。

初めは遊んでますが、ちよつとずつ話が進みます。

おしゃれと私

この世界に来て3ヶ月が経った。一度だけ向こうの世界（地球）に戻ったけどそれ以外はずっとシユヴァにいる。ソナウイによるとこちらの世界に渡る方法は鏡の前で願うだけ。時間の狭間を移動するからこちらの世界では時間は立っていないらしい（私の存在が消えると精霊がシユヴァから離れるため）。比較的地球よりな服装で夜のうちに帰りました。

ちなみに実家に帰るといつものように、愛犬ジンの歓迎を受けて病んだ心を癒された。両親や姉弟は私が異世界に行っているなんてもちろん知らないから大学について聞いてきた。

こちらの神が上手く誤魔化してくれてるみたいで大学から連絡は来ていないみたい。よかった〜搜索願いとかがされてたらソナウイを焼き鳥にする所だったぞ

取りあえずご飯を食べてテレビをみてゆっくり寝た。朝までぐっすり・・・起きたら2時でした。しかもジンが散歩に連れてけと鳴いている声で起きました。

仕方が無いから、ベッドさんに別れを告げてご飯食べて15分程度の散歩に行った。ジンは可愛いから仕方ないね〜我儘も許してしまう。

4時くらいから買い物に行った。財布の中にはソナウイからお給料（もちろん日本円）が入っていたのでお金の心配が無かったのはラッキーだった。

ダルンは楽し好きだけど、やっぱりいろんな服が着てみたい。女の子だもん

長袖シャツ2枚とロンT1枚、チュニツク、パーカー1枚それから短パン2枚とデニムを1本、スカート1枚、パンプス1足を買ってしまった。いつもはこんなに買わないけど、なかなかこつちの世界に來れない（めんどくさいから）から今しか買えないし、どうせこつちのお金は今の状況では必要ない。

可愛い鞆も買いたかったけどさすがにこれ以上持てなかったため今回はあきらめた。今持つてる鞆の中にはお菓子とか下着とか靴下も入っていたし・・・そろそろ両手が限界だ。

いやー満足した。いっぱい買い物も出来たし、地球のご飯もたくさん食べた。

実家の家族にはこのまま（異世界に）帰ると言うてあるので、周りに誰もいないことを確認してから手鏡を使ってシュヴァに戻った。

一瞬で守りの館についた。私の寝室には行く前と変わった事は何もなかった。しいて言えば私の荷物と服装が変わってるくらい。

新しい服を衣装部屋！（なぜかある）にしまつて、私も明日に備えて寝ますか・・・グー

朝、私はマリーさんがいつものように部屋を出たあと軽くご飯を食べてカインの執務室に向かった。いつもはダルンだけど今回はおしやれ（？）をしてチュニツクの上にパーカーを着て、下は短パン（

足に自信なんてないのでもちろんレギンス着てマス）にパンプスを履いてみました。

秋みたいな気候なのでこれくらいの格好だろう・・・うん、また夏の終わりくらいに地球に行きたいな・・・。バーゲンのときに行けばいっぱい買えそうだし。

いろいろ考えながら守りの館を出た。

一応ノックをして（どこからどうみても日本の若者！的な服装で）カインの執務室に入ったら・・・

入ったと同時に空気は止まって、次の瞬間にはコレトさんとたまたまお茶を運びに来ていた神官さん、あと水の大神官ニシナさんが私がいたドアとは違うドアから出て行った。本当に早かった・・・あんなに人間って早く動けるんだ・・・しかも息ひったり・・・

私はみんなを驚かせようとしていたのに、反対に驚いてしまった。なんか悔しい・・・。

どうでもいいけどあの神官さんはあんなに早い動きだったのに完ぺきにお茶を用意していた。

めっちゃスキル高え。

あとコレトさんとニシナさんと神官さんの妙な微笑みが気になるけど、気にしたら墓穴を深く掘りそうだから止めとこう。

カインはフリーズしてました。明らかに書類を受け取ろうとしたであろう中腰で前に左手を出した状態で。

あの体勢辛くないのかな？空気椅子でしょあれは。スラ。ダンク読んできた訳ないし、どこを鍛えてるんだ？

・・・反応なし。いつかを思い出すなあ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・そろそろ何か言おうよ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「カインさーん。足辛くないの？」

カインは私の言葉で我に返った。そして、顔を髪のように真っ赤にした。そして私に無言で近づいた。

赤面カインに驚く私を尻目に自分のダルンを脱ぐと私に無理やり被せた。

ちよつと、何年か前の冬のオリンピック日本代表みたいなテルテル坊主になってしまったじゃない。

不満そうにカインを睨んだ。

あれ？・・・カインはどつちかというと優等生タイプだからがりのモヤシ体型だと思っていたけど結構筋肉付いてるわね。CMでやってる細マッチョってこんな感じかも。ちよつと筋肉足りないけど。

カインは無言で私を睨んだ。そして次の瞬間至近距離で叫んだ。

「なぜ、下着姿で歩くー！！！！！」

おいおい、異世界で初の痴女扱いされたよ。

お祭りと私1（前書き）

今回はあまり題とは関係がないのですが・・・
特に前半部分・・・

お祭りと私1

カインに痴女扱いされた私はその後2時間のお説教が待っていた。
しかも正座で。

「だいたいアオイは年頃の女性としての自覚が足りなさすぎる。し、
し、下着のような格好では襲ってほしいと言っているようなものだ
ろう!! 上着はまだいいとして、何だそのズボンは!! 丈が短すぎ
て足がまる見えではないか!! 慎みをもて!

そもそも私の執務室で仕事をさせているのも、アオイが2階から脱
走しようとした事が原因ではないか!! 二十歳の女性が窓から飛び
降りて脱走するとは何事だ!!

怪我が無かったから良かったものの、もし一生残る怪我でもしたら
どうする気なのだ。

何もするなと言っている訳ではないだろう。部屋から出たければ一
言言えばよかったのだ。

そもそも女性というものは……………（エンドレス）」

「はい……………その通りです……………すみません……………
……………」

初めは黙って聞き流していたけど、大魔王様が降臨しかけたので慌
てて返事をするようにしている。なんだか校長の終業式や卒業式の
話みたいになくてクドイ。

カインって実はもう50歳くらいじゃないのかしら? 時折返事をし
ながら失礼な事を考えていた。が、

「アオイ、1度ならず2度までも上の空とはいいい度胸をしているな？今日はずっとその姿勢で過ごしたいのか？」

「う、ごめんなさい。すみません。きちんと聞きます」

もう痺れて動けない足、これ以上正座でいたら私は生まれたてのバ
ンビよりもヨタヨタしてしまう。何よりもカインが恐すぎた。魔王
様の微笑みは背筋どころか脊髄までも凍らしてしまうほどの威力を
持っていた。

地獄のような時間が延々と続いた。

カインから解放されたのはお昼前だった。だいたい朝の8時半くら
いから12時前まで正座でお説教。どうなるか想像つきますよね？
足は痺れきって感覚がないし、膝は真つすぐ伸びない。立とうとし
てもフラフラするし何より力が入らない。窓の外では小鳥たちや森
の動物たちが私を見て爆笑している。食物連鎖では上下の位置にい
るウサギとクマ。なのに今はクマの頭の上にウサギが乗っている。

チクシヨウ！！本能を超えてまで私の間抜けな姿が見たいのか！！

何よりも気になるのは窓の中心で笑ってる狼もどき？

まっ白毛並みの碧眼の狼なんて私1人（1匹）しか知らないんです
けど。神さまはとっても暇なんですね！

カインのお説教が終わった直後にコレトさんが帰ってきた。

本当にタイミングが良かったので絶対どこかで聞いていたのだと確信した。コレトさんを睨んでやったら苦笑したし。生贄にされた・

「いやゝすみませんね、アオイ様。アオイ様のあんなお姿を私たちが
見ではいけないと思ひましてね（ニコリ）。

それにしてもカインのダルンを着ているアオイ様と肌着のカイン・
・なんだかイケナイ関係みたいですね　・・・・ちよっ！カイン、
冗談だつて、ZYODAN！イヤー止めてー」

カインにどつかれているコレトさんを尻目に私は守りの館に着替え
に行った。これ以上、魔王様の逆鱗に触れたくなかつたし。さっき
の魔王化カインは本気で恐かつたのだから。

いつも通りの服装で執務室に戻るとカインとコレトさんは昼食に行
く所だつた。いつも一緒に食べているので私を待っていてくれたら
しい。お礼を言つて食堂に向かつた。

「アオイ様、今日のお詫びじゃありませんが明日城下の祭りに行き
ませんか？もちろんカインも一緒に」

昼食後のお茶でコレトさんが言つた。

なんでも明日城下で、精霊祭りがあるらしい。国が行う大きなもの
ではなく平民が行う収穫祭のようなものみたい。近隣から人が集ま

り、珍しいものも多くあるらしい。

正直とっても興味を引かれた。神殿の人とばかり触れ合っていたため飽きてきた所もある。何よりもこの国の人を、生活をこの目で見てみたかった。

「どうする？アオイ。政務ばかりでは気が滅入るだろう。私は賛成だが・・・」

最近、私が真面目に仕事をしているご褒美でもあるらしく、カインも承諾してくれた。

「もちろん、行く！明日よろしく願いします。カイン、コレトさん」

明日の予定が決定した。

お説教を外で聞いていたコレトとニシナ

ニシナ「私はカインがこの神殿に来た日から知っているが・・・おそらく今までの人生の

中で話した言葉よりも今日のこの時間の方が多いぞ。」

コレト「ニシさん、相変わらず60歳とは思えない動きするな」。

神官君（名前知らない）

「といい空気読みすぎでしょ」

ニシナ「いや、我々がいたらアオイ様が恥ずかしがると思ってな」

にやり)あの神官は

見守る隊のメンバーだからな。」

コレト「・・・おい、爺さん。あんた何を想像してたんだ」

ニシナ「何ってナニさ。カインも男だからな 理性がぐらっとな。さつきカインも自分で

言っておっただろう。“襲われたいのか”と。」

コレト「俺より上手がいた・・・。」

ニシナ「まさか最後までするとは思っていないさ。せいぜい×××
だろう」

コレト「イヤイヤイヤ!!最後までするより深いから。」

ニシナ「ほほほ。言うだろう# 男は狼なのよ 気をつけなさい
この人だけは

大丈夫だなんて うっかり信じたら ダメダメ ダメダメ

#とな」

コレト「いや、知らねーよそんな歌。てかあんたが唄うとキモい」

お祭りと私1（後書き）

ニシナさんはカインの教育をした人です。

お祭りと私2（前書き）

第2章の内容が進み始めました。

お祭りと私2

明日は城下のお祭りに行く。この世界に来ては初めての外出。遠足に行く前の小学生のように興奮してしまった。何を持っていたいいのかマリーに確認してしまった。

「アオイ様が準備するものはございませんわ。すべてカイン様とコレト様が用意されていましたよ。明日はよい天気になるといいですね。おそらく精霊たちが気を利かしてくれるでしょうけどね。」

あ、申し訳ございません。言うのが遅くなってしまったのですが明日は神官が着る銀の刺繍の入ったダルンを着て頂くようになります。城下の民は守り神の存在は知っておりますが、アオイ様の存在は知りませんので。金のダルンではすぐに分かってしまつて、おそらく大きな騒ぎになってしまいます。」

「了解。お忍びなのね。明日はカイン達にいろいろ買ってもらおう。」

「それでは今日は早くお休みになつた方がよろしいですわね。アオイ様。お休みなさいませ、良い夢を。」

「お休み。」

マリーが部屋から出て行つた後すぐに眠気に襲われた。興奮していても眠れないって事は私にはあり得ない。たぶん。び太君とは友達になれるだろう。

「アオイ、起きるのじゃ、アオイ……ハバ「ハイ！起きた――」

物騒な言葉が聞こえた。この声はソナウイ。今日の事もあるし無視しようと思ったのに。

この起こし方はヤメロと言ったはずなのに。ドSの神様は何を考えているんだ。

「ソナウイ！その起こし方はやめて！！あと今日、窓から私がいじめられてるの見てたでしょ！食物連鎖を無視した動物と一緒に」

「フオフオフオ、気づいておったのか。余りにも面白そうだったから来てしまったのじゃ。まあそれだけではないがのう……」

ソナウイはソイの姿になっていた。ちくしょう、可愛すぎて本気で怒れんではないか、確信犯め。ちよつと寛いでる感じのしつぽの揺れとか犯罪並みに可愛い……やばつよだれが出てきた。うん……？そもそもソイは何で私の夢に出てきたんだろう？

「ソイ、何か用があつて来たんじゃないの？」

「明日、祭りに行くそうじゃの」。途中からわしもこの姿で参加す

るからそのお知らせにきたのじゃ　あの神官たちに追い払われそうにならんようにしておくれよ」

一番偉い神さまにそんな事したら笑い話にもならないな・・・私は面白いと思うけど。しっぽを巻いて逃げる神様・・・プツ。

「アオイ・・・一応上司の我に対してどんな想像をしているのじゃ（呆）」

「ごめん、ごめん。大丈夫、きちんとカイン達を止めるから。

確かに見た目はキレイだけど大きな狼だもんね、知らなかったら驚くもんね」

ソイを撫でながら言った。ソイの毛並みは最高にキレイでうつとりしてしまった。見た目はちょー美人さんだし毛並みは最高だし、見るだけで癒しになる。今日の荒んだ心には癒しは必要（せっかくおしゃれたのに痴女扱い。誰も感想を言ってくれなかった。今度はちよつと寒いけど水着で出たるか）。仕方が無いから今日の覗きもハバネ口起こしも許してあげよう。

「（ぼそつと）・・・アオイは学習能力が無いのかのう。そんな事したらあの小僧はお主を監禁するぞ。」

「え？なんか言った？」

「何もないわい。今日はこの辺でおいとまするかのう。

アオイ、明日は何が起こっても我のいう通りにするのじゃぞ」

「何か起こす気なの？何するの？いたずらするの？えげつないの？スカートめくりレベル？落とし穴？さてはDSのソイだもん、もつとレベル高いの？」

どんな面白そうな事をするのか気になって仕方がない。年甲斐もなくワクワクしてしまった。いたずら上等！最高だ。

「そんな事はせんよ……。お主はすぐに顔に出そうじゃから内緒じゃ。安全は保障するから安心しておれ。
とにかくお主はもう休め。明日から大変じゃぞ」

ソイは私のおでこにキュートな鼻を押し付けた。キャー デコチュ
ー
テンションが一瞬上がった後意識が落ちた。

明日のお祭りはひと波乱ありそうだ……。確信を持って深い眠りに
ついた。

お祭りと私3（前書き）

話を書くのは難しいんですね・・・ほんとにアオイの性格とか分からなくなってきました。

お祭りと私3

今日は快晴。空には雲ひとつない。

一瞬、風が私を包んだ気がしたから精霊にお礼を言った。そしたらもう一度風が吹いた。マリーの言っていた通り精霊たちが頑張ってくれたみたい。

もしこれがあちらの世界で通じたなら確実にマラソンの日は雨だな・
・。マラソン大会は土砂降りに決定してるはず。

「カイン、イナバ、早く行くぞ。」

「了解です、神官長補佐。」

今日の私はただの神官という設定。神官長のカインや補佐のコレトさんはみんな知ってる有名人だから下手に敬語を使われては守り神という事がばれてしまう。でも、カインはいつも通りで問題なかったけどコレトさんがね。要するに駄々をこねまして私を“アオイ”と呼ぶ事を拒否しました。カインは呼び捨てなのによって言ってもNG。

結局、家名だったらということでは“イナバ”に落ち着いた。神官にとって家名は重要ではないから納得したみたい。結構コレトさんは締める所は締めるタイプの人みたい。もっと軽い人だと思っていたから見直した。

コレトさんが私と一緒に呼んだカインさんは滅多に城下に降りないから案内も出来ないみたい。むしろ私と同じくらい分かってないらしい。今も私と一緒にきよろきよろとあたりが気になって仕方がない様子。

ちなみにあとちょっとで城下町につきます。初めは馬で行く予定だったけど馬君（♂3歳）がなぜか拒否したので歩きに変更しました。

あんまり距離が無かったのと天気がよかったのでどっちでもよかったからいいけど。

お祭りは思ったよりも大規模だった。露天も多く出ていたし、何よりも人が多い。夏休みとかの観光地くらい人がいる。

私のそばにはカインとコレトさんという神官2トップがいたからおのずと人は避けてくれる。でも嫌な感じの避け方では無かったから安心した。いや、むしろ主に女性の方からの熱い視線もあったし。この2人は（王族とかもだけど）無駄に顔がいいからすごく目立つたぶん神官長とか補佐とかの肩書が無くても人は避けたと思うぞ。私だけならむしろ埋もれていただろう。

限りなく真実に近い予想で悔しくなったのと、ほんの少しだけムカついたから隣を歩くカインの髪を引っ張ってやった。

コレトさんにトナデ（揚げパンみたいなもの。蜜がかかっている）を買ってもらって休憩していたら近くで悲鳴が聞こえた。

「きゃー、狼が出たぞー」

・・・ソイさん、派手な登場の仕方ですね。

真っすぐこっちに向かってきて・・・すごく目立っているじゃないの。もうすこし日本人みたいに謙虚にさあ、こう慎ましくみたいな？ 気が付いたらそこにいました 的なのが良かった。いかにもで

すう！みたいな登場の仕方はハリウッド好みだぞ。

カインとコレトさんが視界の端っこで身構えたのが分かったから、一応視線で止めた。二人は私が動物と話せる事を知っているから少し任せてくれるみたい。

視線を前に戻すとソイはもう目の前まで来ていた。周りの人は真つ青な顔でこっちを見ていた。何もこんな風にしなくても……。ソイのドSぶりに呆れてしまった。

「ソイ、もう少し地味に来てほしかったわ」

ソイが笑ったような雰囲気でした。しかもニヤツって笑った感じで私の顔をベロツとなめた。一瞬後ろでカインが固まった気がしたけど、私はソイの可愛さにノックアウトしていた。

朝の馬との会話

馬「「いやー、姫さん（アオイの事）の頼みでもそれは聞けねえな。俺は昨日笑いすぎて腹筋いたいんだ。」」

私「じゃあ別の子に頼もうか？」

馬「「ほかの馬も腹筋痛がつてたぜ。そんなに距離無いんだし歩けばいいんじゃないですかい。それに姫さんちよつと運動不足な気がするぜ。」」

私「それを言われると……。まあ確かに近いみたいだし、歩いて行くわ。んじゃあ、馬たちはお大事にね」

馬「「すまねえな。お気をつけて。」」

（アオイ達が行ってから）

馬「創造主は何をしようとしてんだろっ・・・。姫さんに怪我が無ければいいが」

お祭りと私4

派手なソイの登場でさらに目立ってしまった私たち（でも私は含まれてない、クスン）。

取りあえずソイと私が知り合いである事、狼だけど危険では無い事をカイン達に説明した。周りの人たちは初めは半信半疑だったけどカインとコレトさんが納得している姿を見て最後には納得してくれた。

夢の中と覗きでしかソイを見た事が無かったから今回気が付いたけど・・・。ソイはものすごく大きかった。もちろん鳥バージョンに比べたら小さいけど。

元々の狼（テレビとかで見た）も大きいけどソイは1・5倍くらい大きい。確実に立ったら私よりも大きい。私がふざけてまたがって見たけど余裕で歩いていて。まあ余計に目立ったからすぐに降りたけど。

周りの人にはなんだか微笑ましいものを見るような目で見られていた。たぶん、前のKY王子と同じように年齢がすごく下に見られているんだと思う。KY王子の時はまだシンブルドレスとか髪飾り、ピアスをしてたけど今日はダルンを着ている。ダルンは体型をほとんど隠すしこっちの人に比べて私は背が低い。

たぶん12、3歳の神官見習いが神官長達について町に遊びに来ました。それで大きな狼を見てはしゃいでます。みたいに思われているんだらうな・・・。

あれ？おかしいな、前が曇って見えないよ・・・心の汗が出てきたよ・・・。

ハイ！！隣のソイ君笑わない。

「イナバ、これはクシュといって自分の好きなものを挟めばいいんだ。お前は何か食べたい？」

「ん〜じゃあそれ（鶏肉をタレで焼いたもの）をお願いします。」

「了解つと。カーンのクシュを1つ。俺は〜パレでカインは・・・
「ミム」を」

ふーん、鶏肉つばいのがカーン、魚つばいのがミム。コレトさんが頼んだのってなんだろう・・・見た目は何かの肉みたいだけど、焼かれてるから分からないな。もしかしたらこっちにしか無いものかもしれないし。

でもコレトさんがお肉でカインが魚って想像通りというか、分かりやすいというか・・・絶対部活はカインは天文部とか美術部でコレトさんは柔道とかラグビーしてそう。でもモテそうな野球とかサッカーじゃないわね。カインも新聞部とか吹奏楽部みたいに協力するのじゃなくて1人淡々と作業やってそう。

でも2人とも顔がいいからすっごいモテそうよね。コレトさんは面倒見よさそうだし男女問わず後輩にモテそうだけど上手く逃げてそうよね。カインは・・・すっごい年上のお姉さんとかにモテそうかも、案外スゴい迫られて顔を真っ赤にして拒否るけど結局は襲われてそう・・・プツ想像したら・・・

バシリッ

「いたっ！」

面白い想像（妄想？）してたらカインに頭を叩かれた。コレトさんもソイもなんだか呆れた視線でこっちを見てた。むー私が何をしたというのだ。

「カイン、暴力反対！こんなか弱い乙女に何をするの！それに精霊が何かしたらどうするの？」

「どこがか弱いんだ……。精霊もこんな事では何もしない、それに明らかに怪しい笑みを浮かべるアオイが悪い。精霊もその辺はきちんとして見ている。」

「ちょっと考え事をしてただけなのに……。コレトさんも何か言って下さいよ」

「……。早くクシュを食べようぜ。冷めたら上手さが半減だからな」

コレトさんまで……。くそっこの人がドSって事忘れてた。それにしても魔王様は頭の中まで読むとは。気をつけなくてはいい。

……。あ、コレ（クシュ）おいしい。なんかハンバーガーと似た感じだけどこっちの方がおいしいし、身体にも良さそう。このカーンっていうのもちょっと照り焼きっぽくておいしいし。

コレトさんとカインが食べてるクシュも気になるな……。一口くらいくれるかな……

ついジーと見てしまったみたい。周りの様子が全く読めて無かった。ふわっと身体が浮いた……。気がした。

「へ？」

「アオイ（様）！！」

2人の私を呼ぶ声が聞こえたけど私はどうする事も出来なかった。
私は知らない男が乗った馬の上にいたのだから。

ああ、二人が神官であつても馬に追いつけるはずがない。男1人なら隙をつけば逃げられるかもしてない。たとえば私がこの馬から飛び下りるとか、でもそれをするが無傷ではいられないだろう、もしかしたら死んでしまうかも。そうすれば確実にこの男は死ぬ。精霊に殺される。たぶんソイが何も言わなくても何もできなかっただろうな、いくら知らない人でも殺されてはいやだもん。

こんな風に冷静に考えられるのはどこかで絶対に殺されたり、傷つけられないと確信しているから。自分でも不思議だけど・・・。

それにしても・・・この状況はいただけじゃない。危険は無いかもしれないけど正直酔ってしまいそうだ。よく揺れると胃の中のもものが逆流しそうだ。ご飯を食べてた所だし原形を留めたものを出しそうだ。うーん、後ろの男は私が落ちまいと身体を密着してるみたいだけど初対面ではやめてほしい。馬に乗っててちよつと暖まった体温が嫌なんとなん少年っぽいからまあ許すけど（太った親父だったら叫んでたかもしれない）。

馬と同じスピードで走るソイを見て、ついいろんな意味の籠ったため息が出てしまった。

あつソイの口が動いてる。あいつ、私のクシュ食べたな。

カインサイド

「アオイ!!」

ほんの一瞬、目を離しただけだった。アオイが私たちのクシュをじっと見ていたので新しいものを買うかどうか迷って店に目を向けた一瞬。

その瞬間にアオイは何者かに連れ去られてしまった。

無理やり馬に乗せられるアオイを見て抑えが利かなかった。普段の自分ならすぐに馬を用意するか神殿に連絡をして犯人を捕まえようとするだろう。しかし、その時の私は神力を使って無理やりにも不届き者を始末しようとした。この力を使えば確実にアオイを奪い返す事が出来る、しかし犯人は無残な肉塊となるが……。

両手に神力を集めようとした時、私の隣を何かが風のように通った。追い越す瞬間、ほんの一瞬じっと私を見つめた。

ソイだ。アオイに懐く美しい獣。あの白い毛皮に碧眼の瞳……あの瞳……どこかで見たことがある……

……まさか!!創造主ソナウイなのか!?神が裏で動いているのか!?

だから精霊たちもあの男を殺さないのか？

「おいっカイン！！しっかりしろ！！アオイ様が攫われたのに何を呆けている！！」

コレトが後で喚いているが頭がきちんと機能しない。

今、私が何をすべきか必死に考える。どうすれば一番にいいのか、守り神にアオイにとつて一番いい方法は何か。

神が関わっているのだからおそらくアオイに危険は無いだろう。問題はアオイが居なくなつた事で王宮の馬鹿どもが動き出す事だ。王には一応伝えておくべきだろうが後の者はどうするべきか。守り神を人形のように操ろうとする愚かで浅ましい貴族たちにアオイの不在を知らすべきでは無いか……。

もし、アオイが守り神に値しないと訳のわからん事をほざかれるとこのち面倒だからな。これほどまでにソナウイに愛された守り神はいないというのに……。

この機会に貴族の洗い出しをするのもいいかもしれない。

「おい、カイン！起きてるのか？ショックで気絶でもしたのか？」

「起きている。コレト、神殿に戻るぞ。アオイはおそらく心配ない。精霊たちも静かだからな」

「そうなのか……まあお前が言うなら心配無いのだろうけど、（アオイ様が攫われて一番堪えてるはずのカインが言うのならそうなのだろうけど、こいつ今の顔、自覚していないんだろうなあ。めちゃくちゃ邪悪な表情だぞ、絶対口クでもない事するんだろうなあ）」

誘拐犯と私（前書き）

なかなか話が進まない・・・

お食事中的人、十分に時間を空けてから読んでくださいね。

誘拐犯と私

ハイ！あっちの世界のみなさんこんにちは？こっちの世界で守り神してますアオイです？今私はなんと、誘拐されてます

はい、すみません。ちょっと現実逃避してます。現在進行形で馬に乗っています。はつきりいつて酔ってます。馬なんて乗った事無かったしロデオ。ーイみたいに規則正しい動きじゃないから、馬の動きを身体が予測でなくて・・・三半規管は上手く機能できないみたい。今すぐ吐く訳ではないけどいつまでこの状態なのか分からないから精神的にきつい。

「・・・悪いな。お前にうらみは無いんだが俺たちの村に来てらう。神官長と神官長補佐と一緒にいるんだ、さぞ優秀な神官なんだろう？お前についてくるこの白い狼はお前の使いか？」

一気に質問されても馬の上では話せない。初めに声を上げようとしたら舌嚙んだもの。しかも私神官じゃないし・・・。黙っていたら後ろの誘拐犯がため息をついた。

「なんだよ、無視かよ・・・攫ったのは悪いとは思うけど返事ぐらいしろよ。それとも優秀な神官様は俺達平民とは話しはしたくないってか？」

「ごめんなさいねー守り神、このアホはあなたの状況に気が付いていないみたい」

嫌味っぽく言われたけどそれ所じゃないっての（馬は謝ってくれたが）。声を出そうと口を開けたら、吐き気が・・・消化物が食道を逆流してきた。20歳のいい大人が（しかも女）が人前で吐くって最悪だけど、せめて地面で吐きたい。馬の上では勘弁してほしい（泣）

「ちよつつつつ、は、は、吐く」

「・・・・・・・・え、吐くって・・・・・・・・え——————————」

誘拐犯大パニック。慌てて馬を止めてくれたけど、その衝撃が私の胃に直撃。うっこれは胃が一回転して中身がさらに食道に・・・・。今までで一番早くて俊敏な動きを発揮して馬から降りて、速攻で近くの藪に。

ちよつと休憩タイム：お食事中の方すみません

「・・・・・・・・口洗いたい・・・・・・・・あ、ありがとう」

水の精霊が気を使ってくれたのか小さい水塊を作ってくれた。それで口を洗う。はーすつきりした。胃の中には何にも残っていないはず。ちよつと飴とか口にいれて誤魔化したい気分。あゝクシュおいしかったのに、もったいない事したな。

「あゝ悪かったな・・・その、具合が悪くなっていたなんて気がつかなかった・・・大丈夫か？」

「なんとか・・・」

誘拐犯は馬から降りて気まずそうに謝った。たぶんこいつも私の事を若く（幼く）見ているのだろう。なんだか小さい子をいじめてしまつて罪悪感があります！って感じに見える。

この誘拐犯は・・・たぶん高校生くらいの男の子。KY王子よりもちよつと幼い感じだしそれくらいだろう。毎回間違えられるからもうめんどくさい。

ソイは座り込んだ私の背もたれをしてくれている。ソイは大きいから背もたれには最適だったし、なにより触り心地が最高だった。基本健康な私だけど、吐いた後は軽いめまいに襲われてしまうもの。ありがたくソイに寄りかかった。

「自己紹介がまだだったな、俺はアンギオ。歳は17だ。お前は・・・アオイ？イナバ？どっちだ？神官は家名を捨てるんじゃないのか？よく分からねが・・・」

取りあえずお前にはこの先にあるアルド村に行つてもらふ。

無理やり連れていくのは気が引けるが・・・村には神官が必要なんだ。絶対に神殿にお前を返すから来てくれ。礼は・・・うん、何とかするから」

「私は・・・イナバ（つて名乗った方が無難よね）よ。アオイはただの肩書だから忘れて。よくわからないけどそのアルド村に行けばいいのね。」

アングオと後ろのソイに言った。アングオは嬉しそうに頷いている。ソイは・・・

しっぱで私の頬を撫でてきた。

チクシヨウ！めっちゃ可愛いじゃないの！！初めに説明してほしかったって文句言おうと思っていたのに言えないじゃない。

あゝあ、お祭りの後は旅行か・・・今日か明日中に帰ればいけど無理そうかな。

「そのアルド村ってあとのくらい時間かかるの？」

「馬で、そうだな・・・1日半くらいかかるな」

はい、明日に帰るの無理でした。魔王カインの雷落ちそうだ・・・。てか馬で1日半？マジで？あと何回吐けばいいの？！もう何も残ってないよ。まさか胃液とか胆汁まで出せというのか？おいおい無茶言うよ。

絶望感に襲われた。電車とか飛行機がどんなに凄くて素晴らしいものなのか初めて実感した。発明した人ホントにえらいよ。早くこっちの世界の人も同じような発明して！

「・・・我の背に乗ればいいだろう。馬よりは酔いは、マシじゃろうて」

神の声（実際にそうなんだけど）がした。

誘拐犯と私（後書き）

今回はちょっと短めでした。

誘拐犯と私2（前書き）

本当にお待たせしました。今回は友人宅からの更新です。

あとちょっと暗いお話ですので気をつけてください。

誘拐犯と私2

ソナウイの背中中は快適だった。馬よりも地面に近い分ちよつと恐かったけどそれ以外は揺れも殆どなくて……いやっ寝てた訳じゃないのよ！！意識が一瞬飛んだだけ……のはず。

アンギオはちよつと意地っ張りだったけどいい子だった。アルド村に着くまでいろんな話をしてくれた。無駄知識レベルから家庭の医学まで幅広い分野で結構楽しかった。酔う心配も無くなったし歳も近い（精神年齢も）から話は合った。

まあ騒ぎ過ぎて今はお互いの無言だけど。

アンギオは小さい頃の話や家族の話をする時はつらそうだった。先代守り神が亡くなる前までは家族みんな楽しく暮らしていたそうだった。

崩御の知らせは国中の民が悲しんだ。そして絶望したそうだった。守り神が死ぬという事は精霊たちの加護を失う事……。少しずつ、本当に少しずつ国は疲弊していった。だんだんと畑が弱っていった、収穫が減っていった。

アンギオは言った。

「生活が苦しくても家族は仲良くやっていたぜ。妹も生まれたし。テンシンって言うんだ。今は10歳なんだが最近生意気なんだ。

話が反れたな。家族4人の生活は前よりも苦しかったけど楽しかった。父さんも母さんも、村のみんなも仲がよかった。みんなで助け合って生きていたんだ。領主さまもいい人だった。

でも……3年前、新しい領主としてあいつが帝都から来た。あい

つが、ピッグが来てから税が2倍になったし女が村から消える回数が増えた。そしてお袋も消えた……。

後から聞いた話では俺らの村以外も同じだったらしいがな。

村の男が女を探して……あいつの館にも行つて……帰つて来なくなつて……そして頭のない死体が見つかった。身体中傷だらけで、骨が見えてて腐つてて……でも親父だった。俺が見間違える訳ないじゃん。隣のおっちゃんも、食堂の兄ちゃんも分かった。顔が無かつたけど分かった。

誰の仕業なんて考えなくても分かった。見せしめつて事も。

でもどうする事も出来なかつたんだ。村のみんなもそうだった。働き手が居なくなつても税は変わらない。俺はテンシンを守らなくちゃいけないかつた。親父とも約束してたし。

でも、だんだんと収穫量は減つて税が払えなくて……

ピッグは税の代りに女を自分の館で奉公させるつて……。次、税が払えなかつたら無理やり連れていかれる……。俺、耐えられなかつた！！テンシンはまだ10歳なんだぜ？なんで遊ばれて殺されると分かつて……

神官を攫えば精霊たちが帰ってきてくれると思つたんだ。精霊たちが来なくても、神官を攫つた大罪で王が動く。王が動けばあの領主の悪行が暴かれると思つた。

……テンシンを……家族をこれ以上失いたくなかつたんだ。

イナバには悪い事したな、ごめんな」

ああ、ソナウイが知らせたかつた事はこの事か。私はこの国が抱える闇を知る義務がある。私は守り神として守られ自由に暮らせている分、大きな責任はあるはず。

どんなに王さま一家がいい人でも、賢政を行つてもアンギオのように苦しむ人がいてはいけない。

ある意味政治に一番遠くて、そして一番影響を与える守り神。

誰かに傷つけられる心配が無くて、自由に動ける守り神。ソナウイ以外は私を止める事はできない。でも、多くの人はアオイを知らない。有名なのは守り神だけ。

私はこの国を、シュヴァを護る者。私のやり方でこの国を良くしよう。

アンギオが邪な人間ならば（たとえば身代金目的とか乱暴目的とか）ソナウイの指示でも全力で抵抗する。

妹を、村を捨てる方がアンギオにとっては楽なはず。馬で1日半もかけて王都に来て、お祭りで浮かれる人々を見た。一体どんな気持ちで城下にいたのだろう。家族を奪われて苦しんでいる自分と、浮かれる人々。同じ国の人間なのに全く違う現実。それでも自分にとって一番つらい選択をした。

この国では神官の地位は高い。1番位の低い神官を誘拐してもおそろく死を意味するだろう。アンギオ自身も大罪だと分かっている。

でも、神官長たちと一緒にいる神官を攫った。王が村に目を向けるために。

自分が楽には死ねない事が分かっている、自分の死の代りに妹や村を守ろうとした。

自分を犠牲にする方法は正直好かないが、強い覚悟と思いは伝わった。

そんな事を考えながらソナウイの背の上で深い眠りについた。

“私が守り神って事を知らないアンギオ。

心配しなくてもあなたの願いは、思いは叶う。

だって王どころかソナウイが動いているのだから。この国の膿を神

が出そうとしている。

可愛そうなビッグ。あなたは神からも見放された存在。
あなたはこの国にはいない”

私の中で誰かがそう囁いた。

アルド村と私（前書き）

今回は短いです。

そして内容は今まで以上に薄いです。

ごめんなさい・・・

アルド村と私

ソイに乗ってからは快適な旅になった。お尻も無事だったし吐き気もなし。

ちよつとした旅行気分で……っていうのはアンギオには内緒。

やっと着いたアルド村……。はつきり言って廃村。畑はかろうじて緑が見えるけどほんのわずか。精霊が戻ってきててもこの状態って……前はどんなだったのか想像したくない。

なによりも驚いたのは家。ほとんど崩れてしまっている。日本育ちの私はこんな建物、時代劇とかでしか見たことがない。こっちの世界に来てからも基本は神殿にいたし、城下にこんな状態の建物なんてない。

雨風でさえ満足に防げないような建物しかないアルド村。

……明らかに人力によって壊された村。自然の風化ではあんな風にはならない。

精霊が離れ、政府にも気づいてもらえない村。この国にはあとどれくらいアルド村があるんだろう。

「イナバ？ここが俺の村だ。……ひどい有様だろ？この状態で税は今まで以上とかほんと何を考えてんだか。領主にとって俺らは虫けら以下の存在なのさ。」

俺の家に行こう、妹が待ってるから。あ、それと村人は俺以外知らないから俺の友人の神官見習いって事で頼む」

「了解」。

あれっ？ソイがいない……。まあ大丈夫か（ソイに喧嘩売る馬鹿は居ないだろうし）」

「ただいま」。テンシン？出かけてるのか？」

「お邪魔します。妹さんお留守？」

村のはずれにアンギオの家があった。やっぱりボロボロだったけど他の家に比べるとそうひどくない。キッチンと部屋が二つあったけどよく掃除がしてあってキレイだった。

「川に行ってるのかもしれないな。しばらくしたら帰ってくるだろう取りあえず座ってくれ。これからの事を話したい。」

その方がいいか。

私、神官じゃないからどんな事したらいいのか分からないけど何とかなるだろう。さつきから精霊たちがめっちゃ挨拶しにくるし。ようはこの村を豊かにして、領主を何とかしたらいいのだろう。

こうしている間にたくさんの命が消えている気がする。

私にこの国の人、すべてを助けるなんて大層な事は出来ない。

でも今眼の前にある事を全力ですれば、少なくともアンギオ達は助けられる。

早く終わらして、もっと他の村を見てみたい。もっとこの国の状態を知らないと……。

アルド村と私（後書き）

文才がほしい・・・

心底思いました（＋＋＋）

ソイとカインの内緒話（前書き）

話自体は続いていますが、ちょっと違う話が入ります。

最近、暗い話が多いのでブラックカインを降臨させてみました。

ソイとカインの内緒話

アオイが誘拐されてから1日が経過した。おそらく創造主がついて
いるのだから危険は無いだろう。だからといって納得はしていない。
頭では、今一番すべきことは事実を隠しアオイが戻ってきた時に混
乱がないようにしなければいけないと分かつてはいる。

でも許されるのであれば今すぐ探しに行きたい。この時ほど神官長
という立場が邪魔になった事はない。取りあえず、あの男・・・た
とえ神の意思であつたとしても何らかの処分が必要だな（↑アング
イ君ピンチです）。

王宮には守り神は神殿にお籠りになったと伝えた。あとは、守り神
に媚を売るために神殿に訪れる蠅どもの対処をしなくては。

蠅どもは少しでも寵愛を受けようと貢物や整った顔の身内を連れて
くる。いくら姿が整っていようとあわよくばアオイを使ってこの国
の政治を操ろうとする愚か者ばかりだ。おそらく脳も蠅以上にお粗
末なのだろう。

いくら追い払ってもすぐに湧いて出てくる蠅の駆除をしなくていけ
ない。蠅の不快な顔など見たくもないが、身分が上である神官長が
拒否しなければまたすぐにやってくる。

「これはこれはパテラ殿（有力貴族だが落ちぶれ気味）、今回は
何用得神殿に？私の記憶が正しければ10年程こちらで貴殿を見か
けていませんが（につこり）？」

「カイン神官長、コレト神官長補佐、本日は守り神様に御目通りを
と思ひまして・・・神殿で御一人ではお心細いと思ひまして歳の近
い息子も一緒に参りました。」

「はじめて御目にかかります。クローヌス・パテラと申します。」

コレトには眼で黙っておくように合図を送る。コレトが苦笑しながら頷いた。

「（息子無視）・・・そうですか。パテラ殿は昨日・今日と王宮に行かれていないのですか？」

「・・・？いえ、参りましたが・・・」

「そうでしたか。王宮には守り神様がお籠りになられたと昨日のうちに伝えたのですが・・・貴殿まで伝わっていなかったのですね。あなたは・・・いや失礼。伝令は王に近いものから伝わっていくのですから時間が掛ってしまったているのですね。それでは仕方がない。御氣になさらず。」

「つつっ！伝わっておりましたが？」

蠅は顔を真っ赤にして言った。薄汚い顔がさらに醜くなった。
ほんとうに時間の無駄だ。

「これは可笑しな話ですね。貴殿は守り神様がお籠りになったと知
つておられるのに今日神殿に來られた。何をしに？御目通りなど
できるはずが無いのに・・・しかもご子息をつれて」

「（絶句）・・・こ、こちらで守り神様を待たせて頂いても？」

「あなたは守り神様のお身体の状態も分からないのに？お籠りにな
られたという事は創造主と会われているという事。それがどれだけ
神力を使うと？」

貴殿の都合に守り神様が合わせるのですか？王でさえ守り神様のこ

都合に合わせてこちらに参られますのに。いつから貴方は王よりも、いや守り神よりも偉くなったのですか？」

「も、もし御身体の調子がよろしければお会いした「だから（強調）なぜ貴方の都合に合わせなければならぬかと申しているのです。どうしてここまで説明しなくてはいけないのですか？私も暇ではないのですよ。貴方達親子はこんな日の高いうちから出歩けるほど時間が御有りのようですが（失笑）・・・」

「失礼ではないか！！神官長といえども我らパテラ家の者にそのようない草を！！この事は王にご報告させて頂きます」

急に息子が言った。私を睨みながら。

まだいたのか・・・気が付かなかった。それにしても父親も考えなしの大バカ者だったが、息子はもっと馬鹿という事か。

いや、父親も息子を止めないという事は・・・私の想像以上にこの二人は馬鹿なのか。

「ご自由に。私は仕事に戻ります。これ以上貴方がたと無駄な時間は過ごしたくない。」

・・・そうそう王にご報告されるのでしたら王宮に置いていらっしやる荷物をまとめてからにしておいた方がよろしいかと。

ご自分たちが愚かで失礼な行動を守り神様にしようとしていたのか、考えが全く足りないどころか思い浮かばない事を自ら王に伝えるのですから。（蔑みながら）そんな輩にこの国の政治を任せてはおけないでしょう？違いますか？」

「っつ！！し、失礼する！！」

蠅どもはやつと私の視界から消えた。

「カインく、ほんとにキツイな。確かにあの二人は馬鹿だと思うが、あそこまで言わなくてもよかったんじゃないか？」

「話を聞いてやっただけでもいいと思え」

「・・・おまえホントにこえーよ」

「私は事実を言ったまで。使えん奴はいらん」

視界の端で白いものが動いた。

はつとそちらを見ると美しい白狼がいた。眼が一瞬合ったがすぐに逸らされた。

ソイは森を一度見た後、もう一度私を見た。

「・・・先に部屋に戻れ。私は用事がある。」

「了解」。 (見守り隊のレポート書くか) 「」

ソイの元に急ぐ。

十中八九アオイの事だろう。

森に入るとすぐにソイを見つけた。美しい毛並みと碧眼の狼。

「貴方は・・・創造主ソナウイですね」

『いかにも。流石は神官長といったところかの。』

それにしても先ほどの話、聞かせてもらったがお主もはつきり物を申すの。』

さて、アオイの事なんじゃが・・・ちょっと迎えにいつてもらいたいんじゃないのじゃ』

創造主の声は頭に直接響いた。

「それはどういう事ですか？アオイは大丈夫なのですか？」

『今は無事じゃ。しかしアオイには守り神としての試練が待っている。我が助けてはいかんのじゃ。』

「守り神としての試練……。分かりました。私はどこに向かえばいいのですか？」

アオイが無事な事がはつきりと分かって安心した。早く迎えに行きたい。

仕事はコレトたちがすれば問題ないだろう。

『そう急ぐでない。年寄りの話は長いのじゃよ。』

そうじゃな……。少し話をしよう。数年前に我が出会った1人の女の子じゃ。』

ソイとカインの内緒話（後書き）

ソイはカインが結構気に入ってます。

感想まっています。

アルド村と私2（前書き）

どんな風に小説を書いていたか混乱中です。
なんか前と違った、読みにくいなど感じられた方、ホントにすみません。

アルド村と私2

・・・そわそわ・・・そわそわ・・・endless

「・・・あのさー ангиオ・・・ ангиオさーん・・・おい、シス
コン誘拐犯・・・
アングオー!!」

「わっびつくりした! なんだよイナバ」

なにこいつ、被害者みたいな顔してんだよ・・・。なにが「これか
らについて話をしよう」だ。知らない人が聞いたらプロポーズみた
いな事を言ったくせに。

お茶を飲んでいる時間(ちなみに5分くらい)だけでイスから立ち
上がる事25回、コップの中身をかき混ぜる事33回、首の上下運
動19回・・・

ハイ、数えるの飽きました。話は全く進まないし。

「妹さんを探しに行こうか・・・絶対そのほうがいいと思う」

「えっ、別にいいよ。心配なんかしてないし・・・でもイナバがそ
う言うなら行く」

ハイ、ツンデレきました。

ちくしょう、めんどくさいな・・・素直に行けよ 思春期ボーイ

アングイは妹を探し村をもうダツシユ

なぜか私はご近所さん（結構離れてる）の所に預けられた。チクシヨウ、1人でお留守番も出来ないような年齢に見られてるのか・・・

「イナバちゃんはアングイの彼女さんかしら？ 神官さんに手を出しているなんてあの子案外やるわね」

ご近所さんはとっても面白い人だった。ボロボロの家に、やつれた顔・・・それでも私に邪険に扱う事もせず食事まで出してくれた。昨日、カイン達と食べたクシユ。何も入っていなかった。

いや・・・そんな余裕が無いんだ。この村には・・・この国には。自分たちでさえ食うに困っているのに見ず知らずの私に貴重な食料を分けてくれる。そんな人たちが虐げられ、消えていくこの国。

王は・・・貴族はこの事を知っているのだろうか。自分たちが生活している国の状態に・・・気が付いていても現実を知ってはいないだろう。さっきまでの自分のように。

「・・・アングイはいい子よ、本当に。私が娘と夫を亡くしてからずっと妹と来てくれてるの。1人での事はとっても辛い事だからって・・・あの子もメズサ達を亡くしたのに・・・」

「メズサってアングイ達のお父さんですか？」

「そう。父親がメズサで母親ネフロン。二人ともすごく仲がよくて・・・あ、そういえば、ちょっとイナバちゃんそこで待ってて」

ご近所さん（ブラッドさん）は家の奥までいってしまった。
あの人も家族を殺されたんだ……。
娘を奪われ、夫を殺され……。それでもこの村で生きて行くしかなかった。

泣きたくなった。私に涙を流す資格なんてないのに。

私はただ、アンギオを……。ブラッドさんを憐れんでいるだけ。絶対に安全な立場から彼らをみて、同情して自分の事ではないと実感している。

彼らが肉親を殺された事に悲しみ、必死に生きている姿に感動している。そういう映画やドラマをみて涙を流している気分だ。

ソナウイから軽い気持ちで受けた守り神の仕事。如何に自分の考えの甘さに吐き気がした。必死で生きている人たちの事なんて知らずに、受けた仕事。

この国の何万という命を扱う仕事だったのに……

この世界にとってソナウイが絶対神。

無知である事がこんなに恐い事だったなんて……。

人を傷つける事を怖がっていた私はなんて愚かだったんだろう。責任を果たしていないのに恐がっているのは可笑しいわ。守り神にはこの国の人を守る責任がある。

……愚者を消すのも私の責任。

「イナバちゃん！！どうしたの、ぼーっとして・・・体調でも悪いの??」

「っ！だ、大丈夫です」

今、一瞬意識が飛んだような・・・何を考えていたんだっけ？
結構物騒な事を考えていた気がするけど

「これをアンギオ達に渡してほしいの。ネフロンの髪飾り・・・昔もらったんだけど使わなくて」

「きれいな髪飾りですね・・・渡しておきます。あ、ついでにそろそろお暇しますね。アンギオたちもそろそろ帰ってくるでしょうから」

「お願いね、またいつでも来て頂戴ね」

ブラッドさんにお礼を言ってアンギオの家に帰った。
帰ったとたん、もの凄い眠気に襲われた。なんとかテーブルまでたどり着いたけどそこからの記憶はない。

アルド村と私2（後書き）

ご感想などあればご遠慮なくお願いします。Yukiは本当に感想に支えられて小説を書いています。

小心者なので自信がないのです（+|+）（

昔話と私1（前書き）

すごく短いです。

感想ありがとうございます。Yukkiはいつでも大歓迎なのでよろしくお願いします（<―>）

昔話と私 1

それは少し昔のお話・・・

幸せを探して、見つけて、手に入れた女の子。

一瞬で幸せは消えたけど、大切な人を守りたかったから。
だから願った。

弱い私には出来ないから・・・あなたならできるでしょ？
私の代わりに守ってあげて。

あの人から家族を奪わないで。

貴方に会うために私は死ななかったのだから

私は1人映画館にいた。周りにはだれもいない。
じつとスクリーンに映る映像を見ていた。

物語は進んでいく。過去から今へ、そして今から未来へ・・・。

昔話と私2（前書き）

アオイさんは出番なし。

違う人目線で話は進みます。

昔話と私2

一目ぼれをした。

たまたま訪れた市場で野菜を売っていたあの人に。

私の行動は決まっていた。

急いで屋敷に帰って（私の家は貴族では無かったけど豪商で、それなりの生活を送っていた。今日だってたまたま市場を通っただけ。）父親の書斎に飛び込んだ。

「父様！！私、結婚するわ！！」

「ぶはっ！！ネ、ネフロン！？急にどうしたんだ！？取りあえず落ち着いて話をしなさい。それから結婚の前にお前はまだ14歳という事を思い出してくれ」

「今日、市場にいた人に一目ぼれをしたの。たぶんあの人と結婚するわ。愛に年齢は関係ないと思うのよ」

「・・・相手の男はなんと言っているんだ？」

「知らない。まだ話した事、無いもの」

「ネフロンや・・・父様ちよつと話が見えないんだが」

『父は思った。ネフロンは自分の意見ははっきりというし、一度

決めた事はほとんど突き通す。ここまで突拍子の無い話をする事は珍しいが無かった訳ではない。この子がこう言っているという事はたぶん実行するんだろうな・・・と確信を持ちながら聞いてみた。」

「だ・か・ら、その人と結婚するの！！たぶん平民の人っぽかったから私とこの家との縁を絶ってほしいの。兄様がいるし私が跡を継がなくてもいいし・・・ね」

私がお嫁に行くことで事業拡大するかもしれないけど・・・あきらめて下さいな。

私はもうあの人と幸せになる未来しか見えないのだから。

「ちょっと待ちなさい！！」

母様が会話に飛び込んできた。

「ネフロン、貴方はまだ14歳なんですよ。子供の貴方がなにを言っているのですか。しかも相手の方の了承を得ていないのに・・・。まず貴方がしなければならぬ事は学校を卒業する事です。話はそれからです」

母様に反対されるのは初めから予測済み。

だから私は条件を考えていた。

すごく難しい事だけど私なりのけじめをするつもりだ。

両親が私の事を大切に思ってくれている事は知っているし、だからこそ反対しているって事も知っている。

「母様、私は本気です。」

相手の方には気の毒ですが、私はもう決めました。

お二人には私の決意を認めて頂きたいのです。どうせこの家を出て行くのなら笑顔で出て行きたいのです。

・・・私は誓います。創造主ソナウイに。

1・学校は絶対に卒業する事

2・学校に行っている間に事業を手伝って必ず利益を生み出す事

3・相手の方と幸せになる事

これが私の気持ちです。」

創造主ソナウイに誓うという事はこの世界に置いて最も絶対的な事。これを破るという事はあつてはならない。

私はもう言葉に出してしまった。後戻りはできない。

「ネフロン・・・もう後戻りはできないのよ？」

「お前は・・・本当に14歳の女の子なのか？」

両親が呆れてるのは分かったけど・・・それでも私の意思は変わらなかった。

結局、創造主への誓いによって両親を納得（脅迫？）させた。

有言実行！！

まずは誓いの1・2を守るべく私は行動した。周囲が呆れるくらい頑張った。

結局、卒業の日を迎える日には家の財産を3倍にして、事業拡大も完ぺきにこなした。

財産放棄もして、笑顔で家を出た（絶縁状は断られたけど）。両親は泣いて、兄様は呆れていたけど最後には「お前らしい」と笑ってくれた。

私はとうとうあの人の村に行く。
向かうはアルド村！！

昔話と私3（前書き）

今回もアオイさん出番なしです。

お気に入り800超えました〜！！

本当にありがとうございます。yukiはめちゃくちゃ喜んで・・・

（<―>）

これからもよろしくお願いします。

昔話と私3

あの人の家はたしか村はずれ・・・森の方向ね。

んで、ご両親（近い未来のお義父様・お義母様）はすでに亡くなられていて1人暮らしをしているはず・・・。特定の女性はいなくて、彼を慕う幼馴染とか親せきもないはず。

私はこの2年間で調べた情報を思い出しながら彼の家を目指した。もうドキドキして口から心臓が出るかと思ったほどに緊張して・・・。侯爵家との取引でもこんなに緊張しなかったのに。

私は記憶喪失の女の子。歳は16、名前はネフロン。これしか覚えていない。

気が付いたら近くの森にいて、たまたま家を見つけて声をかけた・・・設定。

あゝ完ぺきすぎるわ、私の計画！！

ちよつと森を彷徨った感を出して疲労感を匂わせ一晩泊まる↓翌日泣きつく↓居座る↓たぶん恋に落ちる↓結婚！！

が理想の流れなんだけど・・・この辺はなるようになるでしょう。最終的に結婚出来ればいいもの。

でもソナウイ（神様）はそんなに甘くなかったみたい・・・

「あれっこんな村はずれに女の子が来るなんて珍しいね。」

うーん？もしかして君ってネフロン嬢じゃない？なにかの下見ですか？」

はい！！目標人物登場　しかも、名前とかばれてるし〜これじゃあ記憶喪失設定まるで意味なし　むしろ親元返される

まさかの展開に驚いてしまっって・・・

私はつい言ってしまった。もちろん商売人の娘、不利になる情報は濁したけど・・・我ながらスゴいわ。

「あ、あの・・・（二年前に）市場で一目ぼれして・・・そ、それで貴方に会いたくて（もちろん結婚も）迷惑だとは分かってるんです（たぶん）。でも、貴方に会いたくて・・・両親にはきちんと話しています（むしろ説得して家を出たのよ）。私を貴方の家に（一生）おいてくれませんか？」

「は？え？・・・へ？・・・ちよつと待って・・・取りあえず落ち着け俺。

ネフロン嬢が俺に一目ぼれ・・・で、家まできてる・・・ご両親も知ってる・・・どんな展開でこれ？」

混乱している彼には悪いけど、混乱している時ほどこちら（私）が有利に働く事はないのよね。ごめんなさいね。

「こんな展開ですわ。メ・ズ・サ 私の事はネフロンと呼んで下さいな。」

ちなみに16歳なのでもう大人の女性です。成人男性の家に泊まっても何もないなんて考えていません。もちろん貴方を侮辱している訳ではありません。私がそれを知っていて、承知した上でこの事を申している事をお忘れなく。」

「へ？き、君は「ネフロンです」・・・ネフロンは俺のどこがそんなにいいんだい？貧乏だし、頭だつて良くない。君ほど優秀で美人ならもつといい男がたくさんいただろうに・・・。実際君の活躍はよく耳にしていたし。しかも俺は25歳で、君と10歳近く離れている。16歳の女の子相・・・いや子供相手に何をしろと？」

やっぱりこの人しかいないわ。自分を卑下している所はマイナスポイントだけ後は完ぺき。私の実家の事には触れずに私の事しか言わなかった。私をきちんと「ネフロン」として見てくれている。

「年齢は今は気になるかもしれないけど10年もしたら問題ないわ。あと、そんな美人で頭の良い私が選んだのが、・・・愛したのが貴方なんだから自信をもつて下さい。私は他の男性では無くて貴方が、メズサがいいの。もう家には帰らないわ。
・・・私が貴方の家族になるんだから」

調査をして知った。

メズサは心底“家族”を求めている。亡くなったご両親は決して彼に優しくなかった。亡くなった理由も自業自得だと思った。彼の両親でなければ大嫌いな部類の人間だった。

メズサは平凡な家庭に人一倍憧れをもっていた。近所や友人には恵まれていたみたいだけど、両親から愛された経験が無かったから・
・家族がほしいのに、愛する自信が無いから・
・家族が作れなかった。

なら、私が家族になるわ。

愛された事が無いのなら私が貴方を愛するわ。愛されている自信が無いなんて言わせないくらいに愛してあげる。

「はっ、ネフロン・
・君は本当に16歳かい？どんだけぶっ飛んでるんだ・
・取りあえず今日はもう暗くなってきたから家に泊めるけど・
・明日きちんと説明してもらおうよ」

泣き笑い顔でメズサは言った。

ちなみに追い返されたら困るので夕方を狙って森を歩いていました
たまたまそこで出会ってしまったけど。

とにかく予定とは違ったけど順調なスタートを切れたわ。

計画はというと・
・3年後には可愛い男の子を出産しました

昔話と私3（後書き）

今回はちよつと軽いノリが多かったです。ネフロンは強いです。

ご意見・ご感想等大募集しております。

また、番外編などこんな話が読みたいなどありましたらまた教えてください。

昔話と私 4（前書き）

お久しぶりです。更新遅くなりました。
今回もおかしな文章満載ですがお願いします。

残酷描写あります。お気をつけください。

昔話と私 4

優しい夫に可愛い子供たち。

ホントに幸せだった。

いつまでもこの幸せが続いていくと信じていた。

だんだんときな臭くなっていく領主。

いつのまにか消えている少女たち。

増えていく税。

そして・・・攫われた私。

たまたま領主が昔の私を知っていた。両親と一緒に参加したパーティにいたらしい。全く気付かなかったけど。たったそれだけの理由で私は今、領主の前にいる。

抵抗した際に顔は殴られ、右腕の骨は折られた。

目の前でニヤニヤ嗤っている領主。心底気持ちが悪い。

地位や財産を捨ててまで、メズサ・・・いや平民の所にいった私が理解できないらしい。

お前に理解なんてされたくねーし！！

「お主は本当に変わっている。何を好んで平民なんぞになる。それほど美貌があればもっと良い生活ができるであろうに……。よし、私の玩具にしてやろう。薄汚い平民が貴族である私の視界に入る事ができるのだぞ、光栄に思え」

「御断りします。私には家族が待つておりますゆえ、領主さまの夜伽のお世話は出来ません。」

私は速攻で断った。腐って澱んだ領主の眼を睨みながら。メズサ以外の男に抱かれるなんて耐えられない。たとえそれが死に繋がっていたとしても構わない。これだけは譲れない。

攫われた時点で生きて家に戻れなくなる事ぐらい理解していた。だって誰も帰ってこなかったもの。お隣の娘さんも、他の子たちも。時々、ボロボロになった“もの”が見つかるけど誰かなんてわからない。

だから必死に……。それこそ死に物狂いで抵抗した。殴られたし、骨も折られた。

でも女の私が兵士3人には勝てなかった。もちろん死にたかったわけじゃない。夫が、可愛い子供たちが居る家に帰りたい。

領主は汚い顔を真つ赤にさせて叫んだ。

「ゴミ同然の平民に意見は求めておらん！！

おい、お前たち！！その女を押さえておけ。玩具は玩具らしくしておけばよいものを。」

兵士二人に両側から押さえられた。それだけでは足りず、首輪と足枷を付けられた。

領主に首輪の鎖を引っ張られ、強制的に顔を上げさせられる。

目の前には狂った領主。手には大きな剣をもっている。

ここからは地獄だった。

初めに剣先でえぐるように右目を潰された。私は声にならない悲鳴しか出なかった。

領主はニヤニヤ笑いながら水と縄を用意するよう部下に命令する。水の中に頭を無理やり入れられ、上から足で押さえられた。

必死で抵抗したら腹を思い切り蹴られた。でも首輪を領主が持っているから身体は後ろに逃げられない。

足の腱を切られて、その上から足枷についていた重りを落とす。骨がつぶれた音を聞いて領主は大笑いをしていた。

指を一本一本関節ごとに違う方向に折られた。

何度も痛みで気を失ったけど、そのあと新たな痛みで眼が覚めた。

最後に覚えている自分の姿はひどいもの。

片目はつぶれ、長かった髪は血まみれで半分以上抜かれていた。

右手の指はバラバラの方向を向いており、左手は肘から先が無かった。

両足首の骨はつぶれ、1人では立つてられなかった。

最後に気を失った時、とうとう私が死んだだと周囲の人は考えた。私自身、死んだと思った。

次に気が付いた時、森の中にいた。

周りには腐った死体か朽ち果てた死体しかない。

私が一番新しい死体になるのかしら・・・もう自分が助かるなんて思えない。

『女、お前はあきらめるのか』

目の前に大きなものがいた。私の目はもう見えない。誰か聞こうにも喉は潰されてヒュー、ヒューとしか音が出ない。でも不思議とこの声は頭の中に響き渡る。

諦めるのも何も、私は如何しようも出来ない。死が来るのを待つだけだもの。

『我はソナウイ。お前は我に誓うてまであの男に家族を与えたかったのだろう？ いいのか？ あの男はまた家族を失うのだぞ？』

いいえ、違うの。

私は私が幸せになりたかっただけ。あの人の思いを利用しただけ。メズサが家族を求めている以上に私はあの人を求めている。あの人と一緒にいることで・・・子供たちに囲まれて私は本当に幸せだった。

あの人を守るためなら私はなんでもする。領主の城であの人の助けを待つ御姫様には絶対になれない。私が生きている事で彼が危険な目に会うならば私は私を殺すわ。

創造主・・・もう私に時間は残っていないわ。

弱い私には出来ないから・・・あなたならできるでしょ？

私の代わりに守ってあげて。

あの人からこれ以上家族を奪わないで。

貴方に会うために私はこの時まで死ななかつたのだから

お願い。

メズサを・・・アングオをテンシンをあの男から守って。

暮らしを今以上に楽にされる必要はないし、お金も要らない。

私のようにさせないで。

アオイサイド

映画は終わった。

薄暗い映画館の中、私はひとり泣いていた。

カインサイド

「・・・その女の夫たちはどうなったのですか。貴方の加護があったのなら慎ましく暮らしているのではないのですか？」

なぜこんな話を私にするのだろう。

確かにこの女は気の毒ではあるがこのような話よくある話だ。

『夫はこの時すでに死んでおったのじゃよ。じゃから我は“諦めるのか”と聞いたじゃ。女は少女の頃に我に誓いを立て、そしてそれを守った。少しは気にかけておったじゃが・・・残念な結果になったの〜』

「それならばその女や夫の命を蘇えなさればよろしいのでは？創造主であれば造作もない事でしよう？」

『我は気にはかけておったがそれほど寵愛していた訳ではない。神は平等であつて平等ではない。ただ、この国を創りし者として少しちよっかいを出したくての。』

ちなみにその娘の子供がアオイを攫つたのじゃからの。運命とは不思議なものじゃ。』

・・・裏で手を引いていたのはやっぱり創造主か。

創造主が守り神以外に冷淡である事は知っていたが。

私は神官長という立場だが神がこんな調子でいいのだろうか・・・。
この国の方向を示して下さっているのは分かっているのだが。

「それでは私はアオイの元に向かえばいいですね。アオイの守り神としての試練を邪魔しない程度に見守っています」

『迎えていいんじゃない。手出し無用でならいいがの。』

よいか、カイン。お主がアオイを好いとう事には何も言わん。ただお主が神官長であってアオイが守り神である事は努々忘れるな。神官長は守り神を甘やかす存在ではないのじゃから』

昔話と私4（後書き）

過去編終わりました。

感想・メッセージ等お待ちしております。よろしく願います。

守り神アオイと私¹（前書き）

うん。

ごめんなさい・・・

守り神アオイと私1

眼が覚めた。

やっと眼が覚めた。

優しい碧は眠っていてね。

私は守り神だから。碧ではなくてアオイだから。

優しい碧には耐えられない。

貴方が傷つくなんて耐えられない。

だから私が代わりに。

ねえ心配しないで・・・眼が覚める頃にはすべてが終わっているわ。

ソナウイが貴方を愛しているように私も貴方を愛しているの。

貴方にとって私は貴方の一部だけど、私にとって貴方はすべてなの。

私は貴方のために生まれたの。

貴方を守るために私は生まれた。

いつかは貴方に還るから。

だからお願い。

私を怖がらないで。
嫌わないで。

守り神アオイと私2

『私』が眼を覚めたら目の前にアングオがいた。

真っ青な顔をしたアングオ。

理由を聞く前に精霊たちが教えてくれる。

碧には教えられないこの国の真っ黒い事。

彼らに悪気はない、ただ本能で碧が傷つく事は言わない。

碧がこの村に来たときにはすでにテンシンは攫われていた。ソナウイが一応加護らしきものをしてるから死んではない。

でも何かを失ってはいる。精霊たちはそこまでテンシンに興味が無いから何を失っているかは分からない。

「イ、イナバ・・・テンシンが居ないんだ・・・どこを探してもいないんだ。こんな事初めてだ・・・もしかしたら領主に？なんで・・・」

イナバ！お前、神官なんだろう？テンシンの居場所調べられないか？！

頼む！！イナバ」

「アングオ、落ち着いて。

貴方が取り乱しても何の解決にもならない。ただ単に帰りが遅いだ

けかもしれないし。今度は『私』が探してくるわ。貴方はここで待っていて?」

碧は貴方の事を気にかけていた。貴方が傷つけば碧も傷つく。おとなしくしていて。

「イ、イナバ?なんか雰囲気違うかい?」

「そんな事今はどうでもいいでしょ?とにかく貴方はここにいて。そうすれば何もかも上手くいくわ」

『私』はアンギオの家を出て、領域に向かった。もちろんウジ虫たちを駆除するために。

「あいつの眼・・・金色だった・・・」
アンギオがつぶやいた。

私はソナウイと出会った草原に似た所で眠ってた。

暖かくて、優しい場所。
哀しい事なんて何にもない。

何にも哀しい事なんて思い出せない。
傷つくのはいや。
何も考えられない。

「おいこら、小娘。
なに感傷に浸ってんだ、ボケ。しかもでっかい声でポエム呼んでんだよ。」

聞いてる方が恥かしいぞ。
お前は何のためにあっちの世界に行ったんだ？ポエム読むためか？
おいおい、お兄さん、心底引いちゃうぞ〜」

軽い乗りとは裏腹にお腹に成人男性の全体重がズシっときました。

守り神アオイと私2（後書き）

ご意見・ご感想お願いします。

ちよつとアンケートを行いたいと思います。
詳しくは活動報告をご覧ください。

守り神アオイと私3（前書き）

うん。

なかなか進まない

守り神アオイと私3

「五月蠅い。今まで貴方達が民にしてきた事をしただけでしょう？何をそんなに騒ぐの？」

領域に着く前にその辺にいた兵士を3匹ほど捕まえた。

その場で始末する事もできたけど・・・左右の上腕を折ってから領域に案内させる。

ギャーギャー騒いでいたから見せしめに一匹の兵士の舌を焼いた。本当に耳障りだわ・・・

「お、俺たちだつて好きで殺してたんじゃねえ！！上からの命令には逆らえない。

代わりに俺の家族が殺される！！」

「お願いだ・・・殺さないでくれ！！金ならやる・・・やめてくれ・・・」

兵士たちは泣きながら懇願した。

領域に案内したら自分たちが主人に殺されるって怯えてる。

本当に愚かな・・・ここで死ぬか後で死ぬ。大差ないじゃない。

『私』はどんなに命乞いをしても気にしない。

同情を買おうとしているみたいだけど、貴方達に興味がないのだからそんな事思えないし何よりも可哀想っていう感情は無いもの。

それに・・・精霊たちがいろいろと教えてくれるの。

貴方達の行いをすべて。

どんなふうに民を陥れ、傷つけ、穢して、殺したのか。

上からの命令？幼子を母親の目の前で殺して、夫の前で妻を穢して・
・そして殺す。
ただただ、自分たちがしたかっただけでしょ？鬱憤を弱いもので晴
らしたかっただけでしょ？
自分1人の感情さえ操作できない、犯した罪に気づけない愚かな人
間。

「残念ね。道案内が出来ない貴方達に価値はない。」
ニツコリと笑って言った。

後は精霊たちに任せておけば大丈夫。
この服は碧のもの。髪も身体もすべて碧のもの。
それをあんな生物の血で汚してはいけない。

精霊たちは領域には案内してくれるけど、入るためには兵士が居る。
入ろうと思えば簡単に入れるけど・・・
それだったら大勢を相手しないといけない。碧の髪の毛一本分の価
値もない屑どものせいで碧が埃で汚れてしまつかもしれないわ。

振り返ってさっきまで人間だったモノを見る。やっぱり何にも感じ
ない。

『私』にとって碧がすべて。

碧のためだけに存在する『私』

碧のために生まれた『私』

・・・早く碧に還りたい

碧の中じゃないと寂しい。哀しい。苦しい。

こんな思いを味あわせる人間たちが憎い。

領主が死ねば、碧に戻るかしら。

どれだけ殺したら戻るの？

ねえ、ルグ？

「ちょっと・・・腹の上から離れてよー！！は、腹がつぶれる・・・
。背中とお腹がくつつく・・・」

「それは腹が減ってる時。まあ、どいてやるよ、なんたってお前は
俺の可愛い娘だからな」

・・・あれ？私はお父さん（57歳サラリーマン）の娘のはず・・・

。まさかあの十人前のお母さん（55歳主婦）が浮気していたなんて・・・

いや、ちょっと待って。このお兄さん、どう見ても20代後半なのに・・・お母様！！どんだけ幼い子相手にしたの？やめてよー。おかしいでしょ・・・倫理的に問題ありすぎでしょ。そもそも前から若い子好きって事は知っていたけど・・・限度ってものがあるんじゃないの？引くわ。心底引くわ。

お父さん（この場合はお義父さん？）は知ってるの？いやよー。こんな昼ドラ的展開。

「いや、ありえんだろ。その考え方。俺ただけスーパーベイベーなんだよ。

ちなみにお前の両親も友達も親戚も芸能人も政治家も女王も皇太子も難民のすべて俺の子供たちだ。可愛くて愚かで・・・愛しい子供たち。お前は嫁に行ってしまったが、俺の子供には間違いない。」

やっと私の腹からどいてくれたイケメン兄さんは不思議系だった。

「貴方だれよ？人類みな兄弟っていう宗教ですか？あと、私は結婚してないし予定もない！」

「違う。違うんだなこれが。」

まず、俺はルグ。お前の元いた世界では太陽神って感じの意味だな。
ソナウイと取引したこっちの世界の神っていうのは・・・この俺」

守り神アオイと私3（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしています。

ルゲと私¹（前書き）

大変、大変遅くなりました上に変な文章ですが
よろしく願います。

ルグと私1

ルグ事、頭と中身の軽いお父様の長い、長いロングロングアゴ―
な話を聞いてみました。

ところどころ話は脱線、そのまま経済・政治・エンタメもろものの
話を聞きました。

？な話？

おとん・おかんの出会いから結婚までの話は口から泡・砂糖・砂が
出てきました。

もう・・・居た堪れない。

もう・・・目を見て話せない。

もう・・・腹筋が痛い。腹がよじれる。涙が出る。

うん。ドラマってイケメンがしてナンボですわ。タイタニックも
美形が主人公だからあんなにヒットしたんだ。

あれがその辺の人がしたら・・・ちょっと魅了は半減してしまう。

あゝしょうもない事考えないと腹が立って仕方がない。

九九でも数えようかしら。

「碧く、そろそろ戻ってこい？あゝなんか血の繋がり（？）を感じ
るわ・・・」

五月蠅い。

このアホ、ボケ、タコ、ヘタレ、間抜け、いらん事しい、お節介、過保護、親ばか・・・

いらん事しやがって。

そもそもあんたが原因で、私はソナウイと出会ったのに。

私の意思とは関係なしで嫁に出しといて、心配でした？そやからちよつと細工してみました？

ふざけるな！！

ルグの話を要約すると・・・

碧が壊れる事を防ぐために、もう一人のアオイを作りました。作ったというか力を与えたほうが正しい。

ちなみにアオイは喜怒哀楽でいえば 哀 。

人にとって一番の感情は哀だから。

一番つらい感情だから。

碧は哀しいと感しない。すべてアオイが感じてくれるから。

シユヴァでは感じなかった、たった一つの感情。

いや・・・感じかけてたもの。感じかけたから今はアオイが守ってくれているもの。

確かに私の事を考えてくれた結果かも知れないけど、そんな気遣いはいらない。

私は碧であつて、アオイなのに。

私をいう人間を無視した行動。

ソナウイは言ったのに。

操り人形では無いと。私のやり方であの国を守ればいいと。

“哀しい”を知らない人間がどうやったら、よい国を守れるの？
それが出来ない私は守り神の資格なんてない。

私がああの国での存在意義は無い。

「あんだなんていない。」

「いるだけで邪魔。有害なだけ。」

「いない方がいい。消えて。」

昔聞いた言葉がよみがえる。

私はいらない子なの？

だからソナウイにあげたんでしょ？

ルグと私2（前書き）

大変遅くなりました。

今回もハチャメチャな文章ですが・・・

伝えたいことが文章にならない

ルグと私2

「だからお前を嫁に出すのは心配だったんだ・・・あの爺さんがせかしやがるから。花嫁修業の一つもさせていない奴をよそにやるなんて恥ずかしすぎる。」

ルグは大きなため息をついた。

呆れられた？

嫌われた？

もういらなの？

恐い、恐い、恐い、恐い・・・

お願い。

嫌わないで。

誰にも嫌われたくないの。いい子にするから。

「碧、落ちつけ。碧・・・

碧！！

俺はお前の事を嫌わない。さっきも言っただろう。

お前は俺の可愛い子供だ。嫌うはずがないだろう？お前は今、哀しみは感じられない。怒りや不安しか生まれない。

さっきのため息はソナウイ爺さんに向けてのため息だ。碧が可愛くて可愛くて仕方がない、ただの孫馬鹿だ。碧を早く自分の世界に連れて行きたくて、俺の忠告も無視して連れて行きやがった。

優しくする事が最善ではない事が分かっているにも止められないらしい・・・

壊れた碧でもすべてから守るだろう

だが親は俺だ。世界が変わろうがそんなの関係ない。

子供の教育は親の義務で権利だ。

お前が壊れていくのを見たくない。そんな可能性があるなら出来るだけ消す。

お前が泣こうが、怒ろうが関係ない。」

ルグは私の頭を撫でながら微笑んだ。

ルグの太陽みたいに黄色くて赤い眼が私を見つめていた。

さっきの怒りや不安が薄まっっていく。

「ねえ、ルグ。私はどうしたらいいの？アオイは？」

覚悟と私1（前書き）

今回はルグにーさんが中心でしゃべっております

覚悟と私1

いいか、碧

お前は自分がいらない存在だと感じた。

それはなぜか、よく考えてみる。

幼いころのトラウマからだろう？ 幼いお前にとっては辛かったかもしれない。絶望を味わったかもしれない。

だがそんな人間達とお前は今も付き合いがあるか？

お前がそう感じた原因達はおそらく覚えていないぞ。お前という人間が居た事は覚えていても知れないが・・・

だが勘違いするな。

反対も然りという事を。お前が気づいていない、覚えていないだけで周りにそう思っている人間が居るという事を。

お前が発した言葉、行動で誰かが、・・・俺の大切な子供が傷ついたんだ。

人は生まれた瞬間から死ぬ一瞬まで、人は愛され、癒し、傷つける。だからお前を責めている訳ではないんだ。

もつと他の世界を知れ。

お前にはそれが出来るから、ソナウイに預けたんだ。

知る事ですべてが変わる。

たとえ結果が同じでも、知っていた場合とそうでない場合では全く違う。

そして理解しろ。お前がどういう存在なのか。

お前が今までに食べてきた動物達は？

人間は生きるために他の動物を殺す。それは、仕方がない事だ。他の生物も同じように行動する。

ただ、人間は楽しみとして他の動物を殺す、もしくは飼う。人間達は何も感じないだろうな・・・それが当たり前だからな。愛玩動物だったかな？懐かないと痛めつけ、飽きれば処分する。可笑しい話だろう。

逆で考えてみる。

碧や碧の友人たちが、攫われて殺される事を。ただ単に遊びとして殺される事を。

自分とは違う言葉も通じない種族に狭い檻に閉じ込められる事を。

だからといって人間のすべてを否定する訳ではない。それが、人間達が進化の中で選択した結果だから。

選択した結果はすべて人間が対価を負う。

俺は何も感傷しない。俺は人間の敵でも味方でも無いから。すべての生物の親だから。

碧にした事はアオイに力を与えた事。そうじゃないと碧が壊れるか

ら。壊れた碧は自分だけではなく、周りを壊すだろう。
神として、俺の子供が他の世界を壊す事は許されない。ソナウイが
赦しても許される事ではない。

後は親として。可愛い俺の子供が壊れる事は絶対にいやだ。俺の手
元で守れないなら、守る手段を使っただけだ。

碧。お前が変わる事で、未来が変わる。

お前には変わる責任と、変わらない自由がある。その事で変わる未^き
来への義務もな。

無知は責、知ろうとしないのは罪。分からなければ聴け、否定だけ
はするな。

自分で考え、動け。そしてもう一度考えろ。

お前は守り神。

国のすべてを守るためにお前はそちらに渡ったんだ。
間違ってもいい、泣いてもいい。

正解なんてないんだ。その代わり間違いもない。

ソナウイも言ったんだろう？お前のやり方であの国を守れて。
ただ、さっき言った事だけは忘れるな。

覚悟と私1（後書き）

お願いします。

変な文章を許してください

覚悟と私2（前書き）

難産でした。

覚悟と私2

私はソナウイによって守り神になった。

日本で生活せずにシユヴァで暮らしている。王さまよりも身分は高
いらしく、簡単に言えばこの国で一番影響力がある。

守り神アオイ・イナバ

これが私の新しい名前。新しい私。

でも私は稲葉碧であって、別人になった訳ではないだって。

私が居て、アオイがいるの。

二人で稲葉碧であってアオイ・イナバなの。

当たり前的事んだけど忘れてた。私が私を無かった事にしていた。

「ねえルグ、私はどうしたらいい？アオイを迎えに行きたいけど・・

」

簡単にだけど今のアオイの様子をルグから聞いていた。

直接手を下した訳ではないけど、精霊たちの力を使ってたくさんの
兵士や役人を殺した。精霊達に人間に対して慈悲なんてもっていない。
周囲は血の海となってしまうている。

想像するだけで恐い。私は人を殺した事はもちろん無いし、人が亡

くなる場面にあつたこともない。

アオイを迎えに行きたい、これは本当の気持ち。

でも同じくらいその場に行くのは怖い。そんな場面は映画とか物語のものであつて、現実におこるなんて思つてもいなかった。

「お前の好きにしたらいいじゃないか。言つただろう？お前のやり方でやって、上手くいかなかったらまた考えたらいいんだよ」

ルグは厳しい。進む方向を示してはくれるが道は教えてはくれない。たぶんお姉ちゃんとかお父さんが聞いたら「当たり前だ！！それが社会人だ」って言いそうだけど、わからないんだもん。

いや、分からないというよりも怖いんだ。そんな場面に直面する事が嫌だし怖い。たとえアオイ・・・自分の一部が直面している事だつたとしても。

私は私が一番大切に、私を守りたい。卑しい考えだつて分かっているけど、そんな風に考えてしまう自分に嫌気がさす。どうしたら一番いいのか分からない。

「碧。さっきも言つたが正解なんてないぜ？どんなにたくさんの選択肢があつたとしても実際に行える方法はひとつだ。アオイがお前に戻りたがつているのは知っているな？お前もアオイを迎えに行きたいって感じている。

まずは自分の事を片付けな。それが出来ない奴が他の事なんて出来るか！」

尤もな意見ですな・・・ルグさん。「自分のケツも拭けんくせに何を言ってるんだ」ってよく高校の担任にも言われてた。

まずは私がきちんと“碧”に戻ろう。

そこで次を考えよう。

自分の役割について、責任について。

それからアルド村について。それが終わったら国について。

「行つて来い、愚かで可愛い俺の娘。辛くなったら帰ってこい。」

だんだんとルグの姿が薄れていく。いや、違う。私がだんだん消えていってるんだ。

アオイを迎えにくくために。

まだ怖いけど一生懸命努めてきます。

「いってきます！！ありがとう！！」

「あ、次に来たときに彼氏連れてきたらお父さんマジでキレるからね

あと出来婚は3年以上付き合った場合のみ認める主義だから！！付き合つて。ヶ月、妊娠。ヶ月とか認めんからな」

最後の言葉がそれって・・・。

覚悟と私2（後書き）

ご意見・ご感想をぜひお願いします。

覚悟と私3（前書き）

やっと奴が登場です。

覚悟と私3

・・・ア・・・イ、・・・・・・・・アオ・・・、・・・・アオイ・・・

誰かが私を呼んでいる。とっても心地良い声。
周りのゴミの声ではつきり聞こえない。

『私』にとって碧がすべて。碧のためだけに存在する『私』。碧の
ために生まれた『私』
碧の邪魔ばかりする。
もし碧が望むならすべて消してしまうのに。

「そんな事はしないで、私に戻ってきて？」
^{アオイ}私の前に碧が居る。

碧が私を呼んでいる、私を求めている！！
哀しみしかない私が、今嬉しさでいっぱいになっている！！

でも今私が戻ったら碧を悲しませた人間どもの処理は誰がするの？
碧の中じゃないと寂しい。哀しい。苦しい。
でも、碧が辛い目にあうのはもっと苦しい。

「ありがとう、アオイ。私の事をそんなに考えてくれて。

後は私が考えて、どうにかするわ。

貴方が居ないと私は“碧”では無いから。貴方の替わりなんていないだから早く戻ってきてほしい。

貴方が戻ってきて、はじめて稲葉碧になるの。貴方が居ないと寂しいんよ。

貴方が私を守ってくれたからルグとも会えだし、大切な事を教わった。

貴方が居なかったら私は壊れていたと思うんよ。

ホンマにありがとう。貴方がいて本当に良かった、貴方のお陰で私は今ここにいます。

私の中に戻って少し休んで？」

碧が私を抱きしめてくれた。

碧の中に戻る！！

それに碧が私を必要としてくれた！！

私は哀の感情なのに、温かい涙を流しながら碧の中に還っていった。

カイン

やつと領主の城でアオイを見つけた。

でも私が知っているアオイではなかった。何の感情を浮かべず、兵士や役人を精霊の使って殺している。一部生きているものもいるが、そんなものは稀だった。

いたずらや脱走を試みていたアオイとは全くの別人だ。

創造主が仰っていた“試練”というのはこの状態の事なんだろうか？

あのお方は何も仰らなかつた。神官長である自分がこんな事を考えるのは好ましくないのかもしれないが・・・

もう少し説明しろよつと言いたい・・・

あ…アオイのダルンが血で汚れているな・・・

別にアオイが人を殺そうが何をしようともいいが、あの無表情がアオイらしくない。

素直な感情がそのまま表情として、感情豊かなアオイ。アオイであつてアオイでは無い。

そんな事を考えているとアオイの動きが止まつた。

そして初めて表情が動いた。

初めは驚き、そして次に微笑んだ、本当に嬉しそうに。そして1粒の涙を流した。

“アオイ”が戻ってきた。

なぜだろう…アオイはずっと目の前にいたのに。

そう思った。

覚悟と私3（後書き）

カインさんは基本的に人の生死に対して何も思いません。

初仕事と私1（前書き）

シリアスモードは無くなりました。

統一性がなくてすみません（＜|＞）

初仕事と私1

やっと私にアオイが戻ってきた。目を閉じてても分かる。
なにか冷たくて、小さな光が胸を暖める。

不思議な感覚・・・冷たいと暖かいなんて反対なのに。
やっと私は『私』になったのね。

うふふふ・・・はあ（大ため息）

もうちょっとポエム読んどこうかなあ・・・なんか目を開けたら後悔する気がするのよね。最近、いろんな事（ルグの事とか）を考えすぎて疲れた。

雰囲気ってホントに重要なんだなあつと再確認。ルグのそばではここまで気を抜けなかったというか私お得意の現実逃避ができなんだ。

あゝ方言まで出てきてもたわ。

アカン、アカン。ある意味私が戻ってきたって事かもしれないけど方
言って文章にしたら読みにくいし打ちにくい。

ごほっごほっ こっちの事情でした（汗）

あーチクショウ（乙女なのにこんな事いってゴメンナサイ）

ここがお花畑もしくは譲って王宮か神殿ならパチッって勢いで目を
あけるよ？それこそ「開眼！」って感じで開けるよ？ずっと目を
閉じとくのって結構しんどい。

でもね、ほのかに香るといつかむしろ主張している鉄分の匂い。なんとなく服とか手には付いてないと思うけど（いや思いたい）、現代日本に生まれた私は血に囲まれた生活は送っていない。人間どころか動物さえさばいた事はない。

むしろ自分の血の匂いさえ苦手なんだから、もしこの匂い＋視覚情報を得てしまったら気絶するか嘔吐する自信がある。

私は天才でも勇者でも、もちろん救世主でもない。

ルグと約束はしたけどそんな直ぐには出来ない。早くアオイと一緒になりたかったのは本当。でもこの状況はちよつとね…

【アオイ？どうしたの？】 【辛いの？】

あゝ精霊の声が聴こえる。ちよつとみんな（？）にお願いがあるんだけど…

【なに？】 【何をしたらいい？】 【誰を殺したらいいの？】

いやっ、殺さなくてもいいから。てか過激派にならないで…。私から半径10m…。いや目に入る範囲の血が一滴でも出ている方々をちよつとお外に移して頂きたいなーって。あと空気の入れ替えをしてほしいな。

・・・反応なし！！あ、無理ならいいんよ？サングラスとマスクさえくれれば。

【アオイ？どうしたの？】 【辛いの？】

あれ？さっき聞いたぞ？デジャブ？

【眼を開けてアオイ】 【もう掃除したよ？】 【アオイ、うれしい？】

精霊の声に後押しされてそっと目を開けてみる。

・・・うん、大丈夫だな。ちょっと床に赤い模様があるけど模様だもん！！

許容範囲だもん！！

「ありがとう、みんな。すっごく助かった。」

【よかったね】【いつでも言ってるね】【アオイ笑ってるね】

よっしゃー！！！気を取り直して

新生 碧 稲葉

守り神として初仕事 領主ビッグを懲らしめにいきます！！

初仕事と私1（後書き）

うん…

ごめんなさい

初仕事と私2（前書き）

ノリはすごく軽いです。

大変遅くなってしまいました。
待っていてくださった方、ありがとうございます。

初仕事と私2

うん。

うん？

うん・・・

よく状況がよくわからない。

取りあえず私は 稲葉碧。

ここは アルド村にある領主の城？館？ 取りあえずその中。

んゝそして私はアルド村の領主の城の中にあるどつかの廊下？ホールの中で、なぜかカインの腕の中で拘束されています。

180センチと160センチ。ちょうど鎖骨と胸骨、肋骨達を使って結構な力で、ぎゅーっと抱き“締める”感じで・・・。

イタリアとかフランスの映画に出てくるロマンチックな感じではなく、アメリカ映画のゾンビが人間に襲いかかってきて、ぎゅーとしがみついている感じだな。

「あゝカインさんや。そろそろ離してくれないと魂さんがあっちの世界に行ってしまうよ。」

むしろ頭頂部からちよつと出て、リュック背負ってるよ。」

「はっ、す、すまないアオイ。アオイがアオイでは無かった気がし

て……。いや、アオイが消えてしまったのかと思ったのだ。」

カインは捨て犬みたいな顔で私を見降ろした。薄い青色の瞳からは不安な様子しか見つけられない。私を見て安心したように力を緩めた。

うーん……。カインは腹黒カイン様だったり、魔王様だったり、甘えっ子カイン君だったり大変だな。

「私はもう（・・・）消えないよ。私は守り神だもん。どれが正解かなんてわからない。間違ってるかもしてないけどお仕事しなきゃ！」

・・・ねえカイン。

この国、うーん……。この世界で一番信じられる人間は貴方なの。私かもしれない方向に進みそうになったら止めてくれる？

この国を守りたいけど、どうしたらいいのかわからないの。でも、分からないからって何もしないなんて嫌。この村で起こった事を繰り返したくないの。

お願い、カイン。私が守り神の仕事をきちんと出来るようにそばにいて？」

カインは柔らかく笑った。

そして今度は優しく抱きしめてから言ってくれた。

「もちろんだ……。ずっとそばにいてアオイを助けるよ」

【ねえ風の？】

【何？水の】

【あのニンゲン、絶対勘違いしてない？まああんな言い方したアオイが一番たち悪い気がするけど……】

【僕知ってるよ!!】

【わつ、火の急に出てこないでよ。で、何を知ってるの？】

【ソナウイが教えてくれたの。アオイは天然小悪魔系なんだって】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0908k/>

平凡な守り神

2011年7月16日04時30分発行